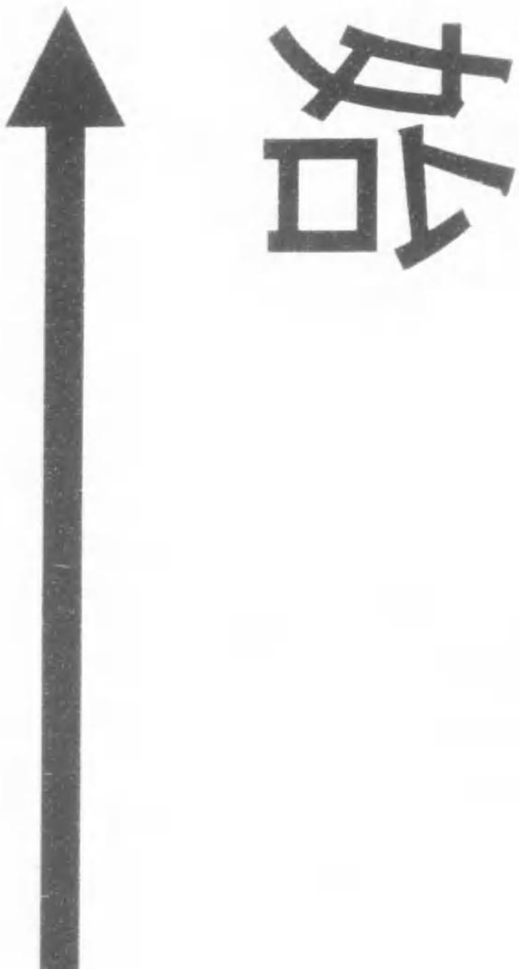

541
243

取引相場の知識

河瀬蘇北著

大正
14. 10. 20
内交

541-243

本書の刊行について

新時代の先驅者として、活社會の第一線に立ち目覺ましい働きをするためには、樣樣の生きた知識を必要とします。然し、その生きた知識の中でも、知つておいて便利といふ程度のものと、是非知らねばならぬといふものと二種の差別がある樣に思はれます。

それから推して、經濟問題――殊に日日の吾人の生活に、直接重大な關係を有する取引相場の知識――の如きは、正に當面の問題として、何人も必ず知つておかねばならぬ知識であると斷言す

ることが出來ます。

その上、毎朝毎夕、眼にふれる新聞・雜誌は、その經濟欄、相場欄に於て、吾人の身邊に迫り來る直接の經濟問題、吾人の生活に立所に影響を及ぼす幾多の經濟取引の動靜を、精細に報じてゐます。然も新聞・雜誌のそれらの欄は、豫備知識なしには、一般人士には解し得られない節も多かつたといふのが、今日までの憾みでありました。新聞一枚手にしても、その重要記事たる一般の經濟消息、取引相場の概況をすら察知し得られないやうでは、これ眞に「現代に聾たるの悲哀」と申さねばなりません。

本書は實に此の意味に於て、今日新時代の國民全體が要望しつ

つある通俗經濟解說中、特に一日も早く會得しおくべき必要のある取引相場の知識を、何人にも解るやうに解說したものであります。從つて、僅僅數時間を割いて、本書一卷を通覽し終れば、その日の夕刊を讀む時から、忽ち溢れるばかりの興味を以て、取引相場の記事を解し得られるといふのも、決して過言では無いと思ひます。

單にそれに止らず、更に本書の使命とする所は、「相場」の眞相を知らずして「相場」を云云する、いはゆる素人觀察の迷妄を開き、一讀明快に、危險な相場、危險のない相場の何たるかを說き、更に相場界の歷史的考察に基き將來の趨勢に及んだことは、全く從

來の解說書の型を打破したものと見ることが出來ます。

本書刊行に際し、著者の勞を謝し、併せて汎く讀者諸氏の御淸覽を冀ふ次第であります。

寶業之日本社

目次

第一　我國の取引市場……一

一　取引所……一

二　取引所の賣買……一六

三　清算取引の方法……二五

四　取引所の諸制度……二九

五　相場の仕方……三四

六　相場專用の言葉……四三

七　新聞相場欄の文字……六六

第二　株式市場……八一

一　東西の二大株式取引所……八一

二　市場の建株……八九

三　重なる株の說明……一〇一

第三　米穀市場……一四一
一　米穀取引所……一四一
二　期米……一五一
三　正米……一五五
四　米相場記事……一六四
第四　商品市場……一六九
一　綿絲……一六九
二　生絲……一八六
第五　對外經濟……一九五
一　外國貿易……一九五
二　國際金融……二〇〇
三　外國爲替……二〇四
四　爲替取組先……二一三

目次終り

取引相場の知識

河瀬蘇北著

第一　我國の取引市場

一　取引場

この書を、私が編する目的は、新聞紙上に於ける經濟記事中、特に商況欄・相場欄を讀まれる人人の指針としたいためで、從つてその豫備知識として、先づ、取引所、卽ち我國に於ける取引市場の事から、お話しするのが順序と思ふ。

抑も、取引所なるものは、進歩した經濟組織に於ては、是非とも無くてはならぬ重要

な機關であつて、今日に於ては、世界の殆んど總ての國にこの施設がある。我國に於ても、明治九年に米商會所規則が出來て、米の取引所を認め、更に明治二十六年、取引所法成つて、それによつて公式に取引所の設立が許されることとなつた。

取引所の數

我國に於ける取引所の數は、大正十二年末現在に於て、實に三十二ヶ所に上り、原則としては、各所に於て毎日單獨に相場が立ち、商品の賣買取引が行はれて居るのである。今之をその種類によつて區別すれば、

▽株式取引所

東京株式、大阪株式、博多株式、名古屋株式、長崎株式

▽米穀株式取引所

新潟米穀株式、長岡米穀株式、京都、神戸、小樽

▽米穀商品取引所

東京米穀商品

▽米穀取引所

堂島米穀、姫路米穀、津米穀、四日市米穀、桑名米穀、名古屋米穀、岡崎米穀、靜岡米穀、近江米穀、酒田米穀、鶴岡米穀、金澤米穀、富山米穀、高岡米穀、岡山米穀、下關米穀、伊豫米穀、佐賀米穀、熊本米穀

▽三品

大阪三品

▽生絲

横濱

である。而して以上のうちには、一取引所で數種の取引を兼營して居るものもあるから

これを一一區分する時は、左の通りとなる。

一、米穀　二十五ヶ所

二、株式　十ヶ所

三、綿絲　二ケ所（東京米穀商品、大阪三品）
四、生絲　一ケ所（横濱）
五、小麥　一ケ所（東京米商）
六、大豆糟　一ケ所（同上）

取引所の組織

我國に於ける取引所の組織は、主として株式會社で、――會員組織のもあるが――その資本金額は、東京株式の四千七百萬圓、大阪株式の四千五百萬圓を最高とし、總資本額壹億參千百貳拾五萬七千圓（大正十二年末現在）に達する。

現行の取引所規定によれば、商品の賣買取引の繁盛な地區内に於ける商人は、政府の免許を受けて、一種若くは數種の物品の取引所を設立する事が出來る樣になつて居る。

然しそれには、

一、同種の商品を取引するものは、一地區一箇所に限る

二、有價證券を賣買取引する市場は、取引所と見做す

三、取引所の資本金は、拾萬圓以上とし、拂込額また拾萬圓を限度とす。

等の制限があつて、尙又その役員は政府が之を任命し、業務について嚴重に監督をする事となつて居るので、經濟組織の漸次進歩發達しつつある今日では、小規模なものは、だんだん淘汰されるの傾きがある。

現行取引所法は、大正十一年九月一日に改正せられたが、その改正の骨子は、株式組織の取引所が漸次大きくなつて來たので、それ等に對して、會員組織の長所を加味せしめ、更に、會員組織の取引所に對しては、法令を整理し、取引を圓滑ならしめんとしたもので、その重要な事項は左の通りである。

一、株式組織の取引所に對しては、

（イ）仲買人の名稱を取引員と改めたこと

（ロ）認可を受け、取引に附帶する業務を兼營するを得せしめたこと

（ハ）強制無限擔保を廢し、賣買双方の相對任意擔保を原則としたこと

二、會員組織の取引所に對しては、

（イ）會員は委托賣買をも爲し得ること

（ロ）仲買人を認めず、會員に限り賣買取引を爲し得ること

三、兩者共通の改正は

（イ）有價證券の市場は、總て取引所と看做すこと

（ロ）取引所に商議員會を設け、重要な事項につき協議せしめること

（ハ）取引の最長期を種類別に定めたこと

（ニ）取引所以外に於て差金取引を爲す一切の取引所類似の施設を禁じたこと

（ホ）委託者保護の爲め、會員及び取引員の身元保證金に對し、第二優先權を認めたこと

等である。

今全國三十二取引所の大正十二年末現在狀況を參考の爲めに擧げて置かう。

（單位は總て千圓）

取引所名	資本金	拂込金	準備積立金	身元保證金
東京株式	四七、〇〇〇	二六、七五〇	三、七七〇	一二、二八七
大阪株式	四五、〇〇〇	二九、五〇〇	二、七四六	一三、〇一七
東京米穀商品	六、五〇〇	四、七五〇	五四七	二、五八五
横濱	—	—	—	—
大阪堂島米穀	六、〇〇〇	四、七五〇	一、一〇一	二、四四〇
名古屋株式	六、〇〇〇	三、三七五	五五八	一、六二五
京都	五、〇〇〇	三、五〇〇	三九六	一、六三二
大阪三品	五、〇〇〇	二、七五〇	四二三	一、四一〇
神戸	三、五〇〇	二、七五〇	三八一	一、三〇八
博多株式	一、五〇〇	八二五	七四	五一四
名古屋米穀	一、三〇〇	一、〇〇〇	一三一	六八六
長崎株式	五〇〇	二六〇	一四	—

廣島株式	五〇〇	二六六	三五
熊本米穀	三〇〇	三〇〇	八〇
酒田米穀	三〇〇	三〇〇	八三
佐賀米穀	三〇〇	二〇〇	三四
四日市米穀	二五〇	一七五	八三
鶴岡米穀	二五〇	一五二	
下關米穀	二〇〇	二〇〇	
岡山米穀	二〇〇	二〇〇	
新潟米穀株式	二〇〇	二〇〇	
津米穀	一五〇	一五〇	
長岡米穀株式	一〇二	一〇二	
姫路米穀	一〇〇	一〇〇	
桑名米穀	一〇〇	一〇〇	
岡崎米穀	一〇〇	一〇〇	

靜岡米穀	一〇〇	一〇〇	
近江米穀	一〇〇	一〇〇	
金澤米穀	二〇〇	一二五	
高岡米穀	一〇〇	一〇〇	
伊豫米穀	二〇〇	一七五	
小樽	一〇〇	一〇〇	

取引所の利便

取引所は、商品の取引を容易にする唯一の機關である。即ち取引所ある が爲めに、株券の如き、また公債の如き、社債の如き、其他、米、絲と云ふ樣な重要な商品の賣買價格と云ふものが毎日一定する。若し取引所が無くて、商品が各個人個人の間に、單獨各樣に賣買せられなければならぬ事になると、その據るべき相場、即ち價格と云ふものは、全く無い譯であるから、買ふ場合でも、賣る場合でも、到底滿足な取引を行ふことは出來ない。更に又賣る場合でも、買ふ場合でも、夫夫各自

に取引相手を探し出さねばならぬ譯で、買ひたいと思ふ人も買ふ事が出來ず賣り度いと思ふ人も賣ることが出來ず、遂に商品の賣買は殆んど行はれない事にならねばならない。

即ち此處に取引所なるものがあれば、それ等の不便が一掃せられ、相場は一定し、又個人間の賣買取引の際に於ても、その相場を標準として、賣買が行はれる譯となるので、極めて便利なこととなる上に、若し取引所を利用して賣買するとすれば、何時でも自由に買ひ、自由に賣る事が出來るのであるから、其の便利は實に大したものである。

かくして取引所は、需要と供給の狀態を正直に寫し、公正な公定價格を、作り出すべき機關となるのであるから、之を大きく云へば、經濟上の好況と不況とは、最も迅速に且正直に常に反映するので、經濟事情を知らうとするものは、何よりも先づ、取引所の取引狀況を究めることが肝要である。

取引所の弊害

取引所の存在は、斯くの如く今日の經濟組織に於て必要缺くべからざるもので、大なる利益を我我に與へて居るが、ものには總て表裏の二方面

がある。取引所も他方に於ては容易ならざる弊害を生ずるものである。然らばその弊害とは如何なるものであるかと云ふと、之は取引所を利用して行はれる處の投機取引から生ずる所のもので、つまりは、「愈ゝやりきれなくなつた、一つ大儲けをやらねば……」とか「地道な事ではうだつはあがらぬ、一つイチかバチかの一勝負をやらう」とか云つて、一攫千金、濡れ手で粟を夢見る連中の賭博場と化し去る素質があるからである。

と云ふのは、取引所の取引方法が、いはゆる差金賣買で、或る小額の金(證據金)を積みさへすれば、賣買の約定が出來、必ずしも受渡をせずともすむ方法による爲めである。即ち之あるが爲めに、一般の人人の間に、不健全、不眞面目な思想を傳播し、時として人爲的に相場を變動せしめて財界を攪亂し、一般社會に大なる害毒を流すことがないとも計られぬ。

取引所は、之を有益な方面に利用すれば、前述の通り、世を益し、人を利することが極めて大であるが、然し、之を不健全な方面に利用すると、折角の公益機關も、いはゆ

る公害機關となつて了ひ、その弊害の及ぶ處頗る重大なものがある。今日我國の取引所の狀況を見れば、益よりは寧ろ弊害の方が多大である樣に思はれてならぬ。

取引所の監督　それが爲めに、政府に於ても前述の通り、監督を嚴重にし、特に取引所法等、獨立した法律の制定がある。

一、設立に對して免許を要すること
二、組織の種類を定めること
三、會員又は取引員の資格に制限を附すること
四、役員は政府之を任命すること（選擧後）
五、賣買取引の種類・方法を規定すること
六、取引の責任を定め、相場の決定等、總ての點に亙つて、詳細な事項を指定し、更に農商務大臣は、若し取引所が一般社會の利益を害し、法律の規定を無視するやうなことをした場合には

一、取引所を解散すること
二、取引所の取引を停止すること
三、役員を解職すること
四、會員又は取引員の營業を停止し、又は除名すること
五、官吏を派して取引所の業務・帳簿・財産その他一切の物件を檢査せしめ、又は會員取引員の帳簿を檢査せしめること
六、取引所の定款を改正し、取引所の決議及び處分を停止し、禁止し、又は取消すこと等諸種の手段をとる事となつて居る、然し今日の社會は、法律の取締によつて善良なるを得る程、道德的でないから、これら嚴重な監督も、あまり大した效果は認められず、裏面ではあらゆる罪惡、惡德が行はれて居ることを、豫め承知して置かねばならぬ。

取引所の役員（理事）　取引所の役員は、會員組織たると株式組織たるとを問はず、之を理事と云ふ。

理事と云ふ名稱は、株式會社の取締役と同樣であるが、我國に於ては、政府監督の銀行會社、卽ち特殊會社の重役は、悉く株主總會が之を選擧した形式にして、政府がこれを任命する事となつて居るので、一般株式會社の重役と區別をする爲めに、一律に「理事」といふ名稱を之に冠して居る。取引所はその性質に於て特殊會社とは異るが、政府の監督の下に設立され、且免許を要するものであるから、卽ち同じくその重役を理事と呼び、首班者又は社長を「理事長」と呼んで居る。

取引員(又は會員)　取引所に於て商品の賣買取引をなすものは又前述の通り一定の資格を要する。而してその一定の人は、以前は一般に仲買人と云ひ、(會員組織の取引所に於ては、會員の外に仲買人もあつた) 比較的寛かに之を許したものであつたが、その爲め幾多の弊害が釀されるので大正十一年の取引所法改正で、仲買人の素質を改め、有力者を取引員中に糾合せしめる意味に於て、株式組織の取引所の仲買人は、之を「取引員」と呼ぶこととし、更に會員組織の取引所に於ては、仲買人を廢して「會

員」だけが、賣買取引をなす事を得ることとなつた。

取引員の特權は、取引所に於ける賣買取引を爲すことで、その資格は左の通り。

一、政府の免許を受けること (免許料參百圓)

二、身元保證金を取引所に積むこと (所屬取引所の資本金の千分の五以上で、壹萬圓を下ることを得ず)

取引所の收入　取引所の收入は、その大部分が、賣買の手數料である、而してそれは受渡しをすると否とに拘はらず、賣買の契約高によつて手數料を課するのであるから、取引所側から見れば、取引員が賣向かうと、買向かうと、若くは受渡不能の爲めに賣戻しや買戻しをやらうと、一向構はない。ただ賣買契約さへ多ければそれでよい譯である。從つて、この方針の下に取引所が經營される以上、空賣買は益ゝ多くなり行くばかりで、餘り讃めたことではない。

二　取引所の賣買

以上は取引所の性質及び我國の制度の大要であるが、私は、第二段に進んで、取引所の賣買に就て、お話をせねばならぬ。

抑も取引所に於ける賣買取引には、大別すれば二種四つの方法がある。即ち第一種は受渡し決濟の上から見る方法、

（一）賣買約定を取結んだ者が、必ず受渡をせねばならぬもの

（二）賣買約定を取結んだ者が、必ずしも受渡しをしなくともよいもの

である。

（一）は現行取引所法規定の實物市場に於ける賣買取引で、以前の直取引又は延取引に等しいもの、（二）は現行法の清算市場に於ける賣買取引で、以前の定期取引に等しいも

のである。

次に第二種は、賣買取引を取結ぶ方法の上から見るので、即ち

（一）賣買値段だけを見て、その相手方を見ない賣買取引

（二）賣買値段と更にその相手とを見る賣買取引

である。而して（一）は各取引所の業務規程にいはゆる競賣買、競賣又は競買で、今日清算市場（以前の定期市場）の賣買方法であり、（二）は相對賣買と稱するものである、今之を詳細に説明しよう。

○實物取引（現物取引）

「實物取引は、實物市場に於ける取引である。約定の當初から實物、即ち現物を引渡又は引取る意志で取引をするもので、その後如何なる事情が起らうとも、必ず受渡しをなさねばならぬもの、斷じて差金、――即ち賣買値段の差金で決濟してはならないと云ふ取引である」。以前は之に類するものを直取引又は延取引と云ひ、或る制限を附して許可して居たが、弊害續出の爲めに、大正十一年九

月に直取引、延取引を廢止して、相對賣買によるこの取引を許すこととしたのである。一般に現物賣買と稱せられて居るものが、この實物取引で、取引者は嚴格で窮屈な規定の下に取締られて居るのである。

（直取引） 直取引、之は現在は行はれて居らぬが、直に株券の現物を賣買取引するのを原則としたものであつて、若し賣買契約の成立と同時に、現物の受渡しをしないにしても、契約成立の日から二日以内には是非とも現物の受渡をしなくてはならぬ事になつて居たのである。從つてこの取引に於ては投機取引の行はれる餘地はないのであるが、その二日以内と特に許可した事柄が弊害の基となつて、往往にして差金賣買、即ち定期市場に影響を及ぼす惡結果を齎らすために、遂に廢止されて了つた。

（延取引） 延取引も相對賣買の方法による取引であつた、賣買の約定を取結んだ者が、必ず受渡をせねばならぬものと云ふ原則に從ひ、賣買契約の成立した日から三日以上百五十日以内に期日を定めて現物の受渡をすることが、この取引の重要點であ

つたが、この取引は、當然差金賣買の取引と抵觸し、投機者は定期取引と、この取引法の二道かけてはげしい投機を行ひ、受渡しも自然公平にまた正直に行はれぬこととなつたので、數年前から之を禁止し、大正十一年九月の改正までは、單に定期取引と直取引とを許して居た程であつた。

但し現在この延取引を公許して居るのは、朝鮮に於ける釜山・群山等の米の取引所で、これは特別區域及び特別事情の下に認許されて居る。

○清算取引 現在取引所に許可される取引は、以前の直取引・延取引・定期取引の三分類法を改正して實物市場の取引と、清算市場の取引とに區分した。從つて一部の人達の間には、この新部類標準の會得が出來ず、清算取引を從來の定期取引なりと即斷して居る向もあるが、實は以前の定期取引の方法に、延取引・直取引の方法を加味したものであることを、先づ承知しておいて貰はねばならぬ。

然も清算取引は、必ずしも實物を引渡したり、引取つたりしなくても、場合によつて

は、差金賣買、卽ち差金の授受をして決濟してもよいと云ふ取引である、而して舊定期取引に於ける轉賣買戻しを自由に許可して居るために、取引所の取組關係者は常に異動し、最初の賣主は、却つて買主となつたり、最初の買主が何時か賣主となつたり、甚だしいに至つては、自分が賣主で、一方には買主になつたりする樣な事がある。

斯くして淸算取引は、渡さうと思へば、何時でも渡せるし、引取らうと思へば、何時でも引取れるし、また受渡しを延さうと思へば、乘換が自由に出來るし、差金で濟ますうと思へば何時でも差金の損益で濟むし、之を實物取引に較べれば、隨分便利である。而もこの點が、「投機に利用せられて、弊害の發生する處であるが、これ亦止むを得ない。」

淸算取引の期限

淸算取引は、新取引所法によれば、有價證券は二ヶ月、米及び小麥は三ヶ月、蠶絲は六ヶ月、棉花・綿絲・綿布は十二ヶ月、大豆・粕は五ヶ月の最長期限が定められ、その期限內に於ける、いはゆる差金賣買を許されて居るのであつて、一面これを限月賣買又は限月制と呼ばれて居る。

但し現在の株式市場——卽ち有價證券市場が、二ヶ月の期限なるに拘はらず、依然舊定期取引時代の三ヶ月制が行はれて居るのは、改正の結果、久しい習慣の爲めに錯雜することを慮つた結果、大正十四年四月一日までこの實施が延期せられたのである。

限月制

「限月制と云ふのは、取引期限の定められた制度で、つまり、一月を限りとして取引をする方法である。」而して我國に於ては、現在は前述の如く株（大正十四年四月迄）米は三ヶ月を最長限度とし、それを三つに分け、卽ち當限・中限・先限と云ふ樣にしてある。而して當限と云へば、その月末の受渡しまでの相場、中限と云へば、翌月末の受渡しまでの相場、先限と云へば、翌翌月末の受渡しまでの相場と云ふ譯である。從つてその月が終ればその月の當限はなくなり、今までの中限が當限となり、先限が中限となり、新たに先限が出來る事となる。この制度の特色は、いはゆる差金賣買で、現株を所有せずに賣り付け、その期限の來た時に於て、その賣り付けた値段を以て、現株を渡さうと云ふ約束を結ぶことによつて、取引の行はれる事である。なほ詳しく說明

すれば

當限　當限と云ふのは、定期取引に於て建つ處の三つの相場、即ち當月限・翌月限・翌翌月限のうちの當月限の事を云ふので、即ち賣買の約定を當月末に受渡をするものを云ふのである。

中限(中物)　中限と云ふのは、定期取引に於ける三つの相場、即ち當月限・翌月限・翌翌月限の中の、その翌月限を云ふので、つまり品物の受渡を翌月の月末にする約定の取引を云ふのである。中限又は中物とも云ふ。

先限(先物)　先限は、先物とも云ふ、現行取引の最長期、即ち賣買を約定してから、翌翌月の月末に受渡しをする取引の事を云ふのである。

差金賣買　差金賣買は今日取引所に行はれて居る清算取引の方法で、即ち法律で公に許されて居る投機賣買の方法である、即ち株式ならば現株を所有せずまたは用意せずとも、その引取りの期限を定めて（當限・中限・先限の規定の下に）賣買

の約束をするので、その期限前に賣付けたものならば買埋めて了ひ、買付けたものならば賣放つて了ひ、その値開きだけの金を、有利であれば利得し、損であれば支拂ふと云ふ遣り方である、尚委しく云へば、假に今日東株を先限で拾枚(拾株)賣りつけたとすれば、それは翌翌月の受渡日までに、その賣りつけた値段を以て、現株拾株を渡さうと云ふ約束で、これを限月制と云ふが、その翌翌月の受渡日に於てなり、または中途に於てなり、有利な狀況となつたならば買埋めてしまへば、その賣りつけた値段と、手仕舞した値段との差が、即ち利得となる譯である。

取引稅　以上清算取引は、實物取引に比して、頗る便利で自由なものであるから、その代りとして、清算取引に對しては、政府は、左の通りの取引稅を賦課して居る。

一、短期の地方債社債　約定代金の萬分の六

二、長期の地方債社債　同　上　萬分の一

三、短期の株式　同上　萬分の一半
四、長期の株式及び一般商品　同上　萬分の二半

三　清算取引の方法

さて以上によつて、取引所及び取引所に於て賣買取引をなす處の取引の種類制度が明瞭になつた結果、進んで知らねばならぬのは、取引所に於ける主な取引たる、清算取引の方法である。

清算取引の方法は、前にも述べた如く、賣買價値のみを見て、その相手方を見ない賣買取引の方法で、先づ

一、競賣
二、競買
三、競賣買

に之を區分する事が出來る。今その三つの方法及びこれに附帶する諸種の方法や、市場

の制度等を詳細にお話しよう。

競賣　競賣とは、一人の買方に對し、二人以上の賣方が、安値と安値で競爭し、その最も安いものが優先する方法である。主として入札方法による。

競買　競買とは、競賣の反對で、一人の賣方に對し、二人以上の買方が、高値と高値で競爭し、その最も高いものが優先する方法で、これも競賣と同じく主として入札方法を用ひる。

競賣買　競賣買は、二人以上の賣方と買方とが、同時に値段のみを以て競爭し、賣値は安いものが優先し、買値は高いものが優先し、その上で、賣買約定を取結ぶ方法であるが、これには更に二つの方法がある。それは普通に「ザラバ式」と云はれるものと、「一定値段式」と云はれるものとである。

ザラバ式　ザラバ式と云ふのは、競賣買に於て、優先力ある買値と、賣値とが一致すれば、その一致するたび毎に、個別的に賣買が成立して行く方法で、我國

ではこの式は採用して居ない。

一定値段式　「一定値段式と云ふのは競賣買に於て、一立會に、唯一の約定値段のみを認める方法で、その約定値段は、賣買當事者が個個別別に定めるのではなく、取引所が賣買關係者の意嚮を綜合・判斷して、時を見計ひ之を決定するのである。從つてその決定には、賣買双方の承諾を得ねばならないのである。

今日我取引所に於て採用せられて居る方法はこの方法で、尙詳しく說明すれば、取引所の係員は、双方から提示せられる値段を綜合して、或一定の値段をもち出す、この場合、贊成は默示でもよいが、反對は必ず明示しなくてはならない。而して明示は、普通指號を以て表現されるのである。斯くして取引所の係員は、その種種樣樣な贊成と反對とを追ひ詰めて、漸次に双方を歩み寄らせ、結局異存申立の餘地のない處まで漕ぎつけて、そこに一の値段を見出し、鈴をならすか、或は板をたたくかして、その値の決定を報じ、卽ち全部の手合せを同一時に成立せしめるのである。

乃で、その決定前に異存のある者は、悉く反對手合せをさせて、賣買關係から離脱するの餘地と自由とを與へるので、殘つたものは、その決定値段を以て買ひたい人であり、賣りたい人であり、また賣る約束したのを取消す人であり、買ふ約束を取消す人である事が明瞭となるのである。かくして各取引員からの出張員は自分の店の賣買の對手の誰かと云ふ事を見究めて、その立會を終る譯である。

立會

現行の清算取引に於ては、前記の如く一定値段式の競賣買によつて、取引を行つて居るが、取引所がその賣買の値段を決定する一區切を「立會」と云つて居る。この言葉の出た處は賣り方と買ひ方とが立あがつて、値段決定の爲めに相會ふと云ふ事からであらうが、普通この立會は、午前と午後に分れ、更に米や株式市場に於てはその午前が二度、午後が二度と云ふ事になつて居るから、一日四回であり、綿絲の如きは午前四回、午後四回、都合八回となつて居る。而して午前の立會を、前場と云ひ、午後の立會を後場と云ふ。

四　取引所の諸制度

取引所の賣買取引を爲すに就ても、諸種の特別な制度があり、それには更に、諸種の變つた名稱が付せられて居る。その主な固有名詞を説明しよう。

前場　後場

現行の取引所法では、定期取引は、午前と午後との二回の立會に限られる。外國では倫敦市場の如き、日に三度も——前場・後場・夕場と——相場が立つ事があるが、我國では斯く二回制を採用して居る。即ち前場と云ふのは、午前の立會の事を云ふので、普通は午前九時にはじまり、十一時に終るのである。後場はこれと同じく午後の立會である。普通は午後一時にはじまり、三時に終る。

而してこの前場・後場も、決して一立會ではなく、四回又は二回の立會があるが、その名稱は次の通りである。

寄付（寄）　寄付は、市場に於ける立會の第一回で、それが前場と後場とにあるから、一日に二回の寄付がある譯である。而して前場の寄付きを「前寄」と云ひ、後場の寄付を「後寄」と略して呼んで居る。相場欄に單に「寄」と書いてあるのは、この寄付のことである。

引（止め）　「取引所に於ける最後の相場を普通「ひけ」と云ふ」、つまり「退場」とか、「閉會」とか云ふことを「ひけ」と云ひならはした事から出た言葉であつて、終りの立會を云ひ現はす譯である、從つて前場にも「ひけ」があり、後場にも「ひけ」があるが、その値を「引値」と云ふのである、或る場合に、この「ひけ」は「止め」とも云はれる、即ち前場の「ひけ」を前止めと云ひ、後場の止めを「後止め」と云ふ。又株式では「ひけ」を「大引」とも云ふ。

前寄　前寄は、前場の寄付を略して云ふ言葉で、寄付は、その場の第一の立會の事である。

前止（前引）　前止は前場の止め又は引を略して云ふ言葉。

後寄　後場の寄付を略して、後寄と云ふ。

後止（後引）　後場の引又は止めを略して、後止又は後引とも云ふ。

當・中・先　當は當限、中は中限、先は先限の事で、それを略したのである。（當限はその月末を以て終る相場、中限はその翌月末を以て終る相場、先限はその翌月末を以て終る相場）

朝場　朝場と云ふのは、生絲市場に於ける、前場のことである。普通の取引所では、總て前場・後場と云つて居るが、生絲だけは、朝場・夕場と云ふ、昔のままの言葉をそのまま持續して居る。

夕場　夕場は、生絲取引所に於ける後場の事である。即ち前場を朝場と云ふに對して、昔からの言葉をその儘使用して居るのである。

發會　毎月のはじめに、市場に相場の建つ時のことを發會と云ふ、立會のはじまる、

立會のひらかれると云ふ意である。この場合は、前月中の先限が中限と換り、中限が當限とかはり、新たに先限が出來る事になるのである。つまりその月の初立會と云ふ譯である。

初登場　立會の場所を場と云ひ、相場の立つ事を、場が立つと云ふ。從つてその場に、株がかかる事を上場と云ふが、初登場とは、今まで建株でなかつた、新しい株式が、はじめて上場する事を云ふのである。取引所で賣買を許される株には、一定の制限があるので、その資格のない會社の株式は登場する事が出來ない。

上場　取引所の建株となつて居る會社の數は、大正十一年末日の調査で、百六十一社となつて居るが、それに新舊の株式があるので、その銘柄は二百四十四種の多數に上つて居る。その多數のうち、殆んど取引が行はれて居ない株式もあるし、また取引せられて居ても稀にしか出來ない株式も少くないが、兎も角それ等の株が、一株でも、場で取引せられることを上場と云ふのである。東京大阪の取引所株、大紡績株や、

砂糖株は、毎日上場して居る譯である。

納會　取引所に於ける毎月のをさめの會、即ち限月制による當月限——當限の受渡をなす前日の立會を納會と云ふのである。

玉　玉とは、相場賣買の品數を云ふ。即ち株式ならば、賣付け又は買付けた株數、米ならばその石數、綿絲ならばその梱數、生絲ならば斤量、それを玉——つまり「玉がいくつ」と云ふのである。また建玉と云ふのは、買付けたり賣付けたりしてそのままになつて居る玉のことを云ふのである。

受渡　受渡とは金を受取つて品物を渡すこと、即ち取引所に於ける定期取引の際に、その約定の期限が來て、品物と金とが交換される事を云ふのである。我國に於ては毎月の月末、納會をすましてから受渡する事になつて居る。尙その受渡の際の品物の値段は、大抵引渡日に近い數日間の、賣買値段を平均したものを以て、標準とするのである。

五　相場の仕方

さて以上によつて、取引所に於ける諸般の制度に就ての知識は、ほぼ理會する處があつたことと思ふから、私はここには、我我が取引所を通じて取引を行ふ順序、即ち相場をする方法に就てお話しよう。

前にも述べた如く、取引所には會員組織ならば「會員」、株式組織ならば「取引員」、なるものがあつて、その取引の衝に當つて居るために、一般の人は、取引所に出掛けて行つて、直接に商品の賣買取引を爲すことは出來ない。之を理論上から云へば、取引の公正を計る上からも、經濟組織の上からも、一般に誰でも取引所に於て取引をなす事を得るのが正當であるには相違ないが、今日の制度に於ける物品の賣買取引は、双方の取引相手に確實な信用があり、かつ株券取引に關する、十分な知識と經驗とがなくてはならぬもので、若しも信用のない無責任な人人や、無經驗な人人に取引を許すことにすれば、之により種種の弊害を生じ、更に非常の複雜となつて、遂に取引不能と云ふ事に陷つてしまふ。一般の素人には、一切直接の取引を禁じ、專門の取引業者――即ち以前は仲買人、今は取引員だけに取引を許す譯である。

是に於て一般の人人が、株又は米を買ひ、又は賣らうとする際に於ては、總てこの取引員の手を通じなければならないので、つまり取引員は、一般の人人から註文を受けてそれを纏めて取引所でその註文を受けた株の取引を行ふ譯である。

取引の遣り方　この取引の仕方に就て、更に委しく說明をすれば、諸君は、各取引所附近に、堂堂たる店舗を構へ

何何取引所取引員　　何某商店

の金看板を掲げて、多くの人人の出入して居るのを見聞せられるであらう、それが即ち以前の仲買店、今の取引員の店で、その店からは、毎日諸方の銀行や會社さては事務所

などに註文取りの外交員が出て居るので、若し取引をしようとする場合には、それ等の外交員にたのんで、註文を發してもよいが、更にそのつてがなければ、自らその店に行つてもよく、又は電話を以て註文を發してもよく、更に遠方の人ならば、電話なり手紙なりで、買註文又は賣註文を發してもよい。斯くして取引員の店では、それ等の註文に從つて、株なり米なりを買ひ、又は賣るのである。處でそれもただ單に註文を發した許りでは、危險が伴ふので、各取引店では、その註文品に對して證據金と云ふものをとるのである。勿論、實物取引は、金錢と現物とを引換へるのであるから、證據金を納入する必要もないが、清算取引に於ては、總てがこの證據金によつて決行せられるのである。

證據金　さてこの證據金と云ふのは、清算取引に於て、賣買何れへでも仕掛けた時に、取引員ならば取引所へ、お客ならば取引員へ納入する、規定額の現金又は定められた代用の、有價證券のことを云ふのである。なほ單に證據金と云ふと、以上二つの場合の何れであるかと云ふ疑問も起り易いので、之を二樣に區分し、（一）即ち取引員

が取引所に納入する證據金を「本證據金」と云ひ、お客から取引員に納入する證據金を「委託證據金」と云つて居る、何れにしても、清算取引の特色は、この保證金――それも現物に比すれば、極めて少額な金によつて、取引を行ひ得ると云ふ事であるがために、この證據金は、頗る重要なものである。

本證據金　本證據金は、取引員が取引所に納入する處の證據金のことである。

委託證據金　相場をなさんとするものが、取引員即ち仲買人に對して納入する處の證據金を委託證據金と云ふ、各取引所に於て、その額は決定するのである。

敷　上記の證據金、即ち取引員から、取引所におさめる處の證據金（本證據金）客から取引員におさめる處の證據金（委託證據金）を、市場では俗に敷と云つて居る。つまり敷金と云ふ昔の相場言葉をそのまま受け繼いだものである。

敷の額　敷の額、即ち證據金の額は、株式市場ならばその株券によりその金額に相異があり、又その取引の狀況によつてその額を定めるので、一定せぬが、先づ

一株貳圓參圓と云ふ處から普通五圓拾圓程度で、價格の高い、然も變動の激しい株になれば、參拾圓四拾圓（米も値があがれば、それについて自然敷の額もあがる）と云ふ額になるのもある。從つて各品目に對する「敷」を知りたいと思へば、取引店へ問合はせると、その時に於ける定まつた額が直ちに解る。

つまり取引所に於ては、その當時の狀況により、何株は何圓、何株は何圓（米ならば一石いくら）と、その證據金の額を定めて、取引を行ふ取引員にそれを納めさせる、一般のものは取引員にその敷を渡して註文すると云ふ事になるのである。

かくしてこの證據金も、相場の動きが甚だしい時には、隨時適當な方法によつて、危險を免かれる方法が許されて居るが、それは左の三つである。

追敷　追加證據金のことで、證據金を「敷」と云ふ事から追敷と云ふのである。つまり買つた處が、相場はだんだん反對となつて行き、その値の開きが著しくなつて、證據金の半額以上に達した場合、その半額を更に納入せしめられる事を云ふのである。

賣つた時また同じである。

直敷　相場が一度に、豫て納入しておいた證據金以上の値開きに變動した時——卽ち自分の仕掛けた時よりも——前の證據金と同額の證據金を納める事となつて居るが、それを直敷と云ふ。

增敷　增敷と云ふのは、相場の變動が大きくなつた場合、又は大きくならうとする形勢の時に、豫め危險を防ぐ爲めに、賣買双方から、更に證據金を徵收する事、それを云ふのである。

取引の賣買單位　かくして淸算取引の賣買單位は、株・米・綿絲・生絲　悉く十を以てその賣買の單位としそれ以下はたとひ客から註文があつても取引を行はない事の定めとなつて居る。卽ち株は十株、米は十石、綿絲は十梱、生絲は十斤と云ふ樣である。

濡手で粟　濡手で粟と云ふのは、粟の中に濡れた手を入れると、手が粟ばかりとなる

と云ふ事で、卽ち俗に一攫千金と云ふのと同じ意味に用ゐられて居る。而してこの事は、千人に一人か、又は萬人の二三人位、折折この取引市場に現はれる事あるが爲めに、世間滔滔としてこの夢にあこがれ、市場へ行きさへすれば、直ちにこの事が實現される如くに考へるが、中中誰にでもと云ふ譯には行かぬ。然し以上說明した如く、淸算取引に於ては、僅かの證據金――一株五圓の證據金ならば、五十圓の金さへあれば、十株の買付が出來る譯で、兎も角、五百圓以上の相場が出來る樣になつて居るから、若し一たび好材料に當面し、熱狂相場でも出て、一株に五十圓も相場が暴騰したと云ふことになると、其買付を轉賣して、一擧にして五百圓の利益を得ることが出來ると云ふ樣な譯であるから、この夢にあこがれるものの甚だ多いのも無理はないのである。

不正仲買店（呑み屋）

現行法となつて取引員の資格が嚴重になつた爲めに、餘程少くはなつたが、仲買店のうちには、お客からの註文を取引所へ出さずに、自己の懷合で勘定して、客には嘘をついて居るのが往往にしてある、これは界隈で

云ふ處のいはゆる呑み屋なるもので、これに引かかると、利益があつても利益金はとれず、甚だしいに至つては、曩に渡した證據金までも、横領せられたりする。取引所は取引員から身許保證金をとつて居るからよいが、お客は金を出しただけであるから全く遣りきれない。

現落

取引員の店で、こんな激しいのは尠ないが、然し、客から幾何註文があつたかは判明せぬから、取引店では、註文の半分とか三分の一位を取引所の帳簿に載せることを普通として居る。それを市場では、公然と三分差、五分差と云つて居る、其他に「現落」と云つて、頗る巧妙な奸策がある。それは、例へば客が前日の後場に買つたとすれば、翌日の前場には買つた玉數だけ轉賣して、取引所の帳簿の仕切前に始末して了ふのであつて、結局呑みと同樣になるのである。

現物屋

取引所の取引員――卽ちもとの仲買人は一定の制限があつて、嚴重な資格制度が定められて居て、定期取引にあたるのであるが、現物は取引所の手を經

ずとも、賣買が危險なく出來るので、取締る事を要せぬ。是に於て取引員でなくて、株屋町・米屋町に店を張つて、その現物の賣買にあたつて居るのが、この現物屋なるものである。

然し我國のいはゆる現物屋は、現物屋と云ふのは看板で、内實取引員の店と連絡をつけ、その店の名によつて、定期取引のお客を取扱ひ、または米ならば、合百その他の賭博的取引をなすのを常として居る。謂はば株屋町米屋町の寄生蟲とも云ふべく、時にはお客の金を横領したり、又は儲かつても儲からぬ樣にして、呑む事をのみ專門として居るのがある。つまりは制裁がないので、それをくぐつて商買をしようと云ふのである。

六　相場專用の言葉

取引所内では、種種な用語が行はれる、それと云ふのは、我國に於ける取引市場の歴史が古く、この世界はまた別種の世界をなして居たと云ふ事と、一面には總て緣起を尊ぶ、また、簡潔を尊ぶと云ふ事から、全く世上の言葉とは沒交渉と思はれる樣な用語が中中數多い。

而してこれ等の言葉は、市場に出入する上に於ても、亦新聞の商況相場欄を讀む上に於ても必要であるから、その主なものに就て、簡單な説明を加へて置かう。(アイウエオ音順)

商内　商内と云ふのは、商賣と云ふ言葉の俗續みで、昔、商業のことを「あきない」と云つた事から、さう云ふ字を特に當てはめたのである。つまり取引の出來たこ

と、賣買をすることを商内する、商内があつたと云ふのである。

當り　當りは、儲けた事である、大當りと云へば、大儲けをした事である。よく「あの男は當つた」とか「今日は大當りだつた」とか云ふ言葉を市場ではきく。

煎れ　煎れは、賣つて置いた玉を損して手仕舞ひする事で、投げ（買つて置いた玉を損して手仕舞ひする事）の合言葉である。

幾圓丁度　幾圓丁度と云ふのは、つまり上も下もない、幾圓ぽつきりと云ふ譯で、五圓丁度と云へば、五圓丁度と云へば、百圓丁度と云へば、單に百圓と云ふ譯である。特にこの丁度なる言葉をつけなければならぬのは、相場は常に五圓貳拾錢とか、五圓參拾五錢とか云ふ値が出て居て、ただ五圓と云ふと、その下に端したがつきさうに思はれて、間違ひ易い樣な場合があるので、五圓丁度と云つて、その下には端數がないと云ふ事を示す爲めの言葉である、しかし圓以下には丁度と云ふ場合はない。

幾圓割れ　市場でいふ割れとは一定の値を保つて居たのが、その値を割つて下落することのその「割れ」である。その場合、例へば九拾五圓であつた相場が、九拾四圓八拾錢と落ちた時には、これを九拾五圓割れ、又は單に五圓割れと呼ぶのである。

賣拔け　賣拔けと云ふのは、相場に賣るべき場合が來た事を知つて、躊躇なく賣放つたが爲めに、それが頗る有利であつた場合のことを云ふので、よく「あの人は上手に賣拔けた」などと云ふのである、つまり一歩誤れば、損をする筈であつたのに拘はらず、その危機を脱したのを指すのである。

賣崩し　賣崩しとは、定期取引に於て、自己に都合のよい相場を作らうとし、又は相場の變動を起してその間に甘い儲けをしようとして或る種の策士が行ふ處の手段である。卽ち先づ自ら巨額の賣物を出し、且更に或る種の方法を以て、他人をもこれに倣はしめて、賣物續出の狀態を起さして相場を崩し、斯くて其崩れたのを見すまして、今度は買方に廻り、その間の差合を儲けようとするものである、然しこれは一種の

奸手段で、決して正當の遣り方ではない。

賣人氣

市場には、常にいはゆる群衆心理による處の「人氣」なるものがある。賣人氣は、その人氣が「賣り」に傾いて居る時の事を云ふので、この人氣は往往にして人爲的相場を作ることがあるから注意を要する。

薄商內

市場に於て賣買の行はれる事の少ない場合を普通薄商內と云ふ。又個個に就て云へば、例へば海運界の不況の爲めに、船舶株に對する人氣が冷却して、その賣買が極く稀薄になつた時の如き、それを船舶株は薄商內と云ふのである。

押目買

買付けた處、それに一度高い値が付いた、普通ならば其處で儲けて手仕舞をするのであるが、それをやらずに放置して置き、再び安値が出るのを待つて、それを更にまた買ふ事を押目買と云ふのである、つまり今度高値の出た處で賣つて、一儲けをしようと云ふのである。これは玄人のやる事で、同時に主として好景氣の相場の動きが激しい時に行はれるのである。

表戰

表戰とは、家の表、卽ち家の外で、戰爭をすること、つまり取引所以外で相場をすることで、米相場に於ける合百、又は空米相場の如き、不正の相場である。

買占め

買占めとは、相場の安い時、買つて買つて買集め、その後の相場の動搖をうまくくぐつて利得をすることである。これは主に商品の取引に、一派の策士がやる手段であつて、卽ちこの買占めの結果、弱氣にまわつた人人は、買占めた人の手から、その商品を買戻さねば、その商品を引渡す事が出來ないと云ふ窮況に陷るために、やむなく先の約定値段よりは高値を以て引とるか、然らざれば買占めた人に泣きを入れて解合をなすと云ふ狀態となるのである、かの大戰後の好況時代に、增貫が米屋町を騷がしたのも、この買占めの手段である。然しこの手段は決して眞面目な遣り方ではない。

銘柄

銘柄と云ふのは、市場に建つてをる處の賣買の目的、その一つ一つのことを云ふ。つまり株式で云へば、東株とか、新東株とか、鐘紡株とか云ふのを云ひ、正米で云へば、肥後米とか、越後米とか、慶尙南道米(朝鮮)とか云ふが如く、綿絲で云

へば、白鳳・紫鳳などと云ふ類のものである。

地方筋　地方筋と云ふのは、東京大阪等の都市でなく地方に出て、株や米の賣買をする人人の事を云ふので、玄人筋(取引所關係者又は市場に關係する人人)銀行筋(銀行の人人)など云ふのと區別をする爲めである。「地方筋から多數の註文があつた」など云ふのはその例である。

惡目　惡目はあくめ、又はわるめと云ふ、甚だしい悲觀狀態に陷る事を云ふので「目」と云ふのは、「よいめ」にあつたとか、「わるいめ」に會つたとか云ふ俗語であつて細かく云へば、運命の神が齎らす處の、ある一時の狀態、又は狀勢を簡單に表はす文字である。

ぼり屋　俗に、普通の値よりは高く品物を賣りつける事を「ぼる」と云ふ、「暴利」といふ字から出た言葉であらうが、「ぼる」と云ふ語から發して「ぼり屋」なるものが出來た。而して市場に於けるぼり屋と云ふのはつまり他所の店よりも高い手數料をとる店やまた客をだしにして無闇に儲ける店を云ふのである。

手持筋　手持筋と云ふのは株式ならば、現物でその株をもつて居る人人、米ならば正米を所有して居る人人のことを云ふのである。而してこの手持筋が、定期をやるのは、品物なしに、即ち純然たる投機でやるのとは異つて、どこかにゆとりがあるので、時には多少の影響を市場に及ぼすことがある。

跡氣配　大引跡の氣配のことで、つまり翌日の相場を豫測して、市場に於て想定の値段の現はれる事を云ふのである。

氣配　市場に於ける取引が終了して、つまり場が終つた後に於て、今度は市場でではなくして、取引者同士の間に於て、取結ばれる想定値段がある。それが、一般に氣配又は跡氣配と云はれる。而してそれは普通その翌日の相場に變動のありさうに思はれる場合に於ては、その想定値段によつて豫め賣買せられるので、隨つてこの氣配の强弱——高下が、翌日の相場の重要な基礎となり、相當その値段を、左右するに至

ることがある、卽ち强氣配と云へば、上向いた氣配、弱氣配と云へば、下がつた氣配である。

玄人

玄人とは、商賣人と云ふことである、つまり取引員とか、仲買人とか云ふ樣に、相場を商賣とし、株屋町米屋町に生活して居るいはゆる相場師と云はれる人人のことを云ふ。一般に玄人は、相場に通曉し、狀勢を見る事も敏であるから、常に市場に於て、最優者たるべき筈であるが、市場の事は、往往にして理窟や、議論通りに行かぬ事がある爲め、決してさう許りも行かぬ。

地場

地場は、市場のある土地と云ふ義で、卽ち株式市場ならば、株屋町、米市場ならば米屋町を地場と云ふのである。「客筋の大半が賣狙ふ結果として、地場の反抗買を誘發した」などと云ふ場合は、土地の人人と云ふ意味に解さねばならぬ。

場面師

場面師とは、又の名を相場屋とも云ふ。お客又は地場の人人で、日日市場に出て來て、相場の氣配のみに重きを置き、時時刻刻のうつり變りに、掛引や

思惑の賣買をする者を云ふのである。而してこれ等の人人は、その間にうまく立廻つて、日日いくらかづつの日當にありつけば、よいとして居るのである。

薄張呑屋

呑むと云ふのは、仲買人が、客から註文を受けながら、それを取引所に出すことをせずに、自分の懷勘定にして了ひ、結局客から預つた證據金をまきあげて了ふことを云ふので、かかる仲買店を呑屋と云ふが、薄張呑屋と云ふのは、一圓か二圓の資本で、米屋町に出沒し、客の註文を受けて、賭博的米賣買をやる商買人を云ふのである。

買下る

相場が下るのを追うて、買ひ進むのを買下ると云ふ。つまりこの狀態を、いはゆる目先安前途高と云ふ樣な市況に際して行はれるので、主として財界不況の際に現はれる方法である。

買人氣

買人氣は、賣人氣の反對で、市場の人氣が「買ひ」に傾いて居る場合の狀態を云ふのである。この人氣は時に人爲的相場を作ることがあるために、注意を

要する。

空賣り

現品をもたずに、思惑のみで賣ることを空賣りと云ふ。主として米相場に行はれる、空米相場と云ふのも同じである。

掛け外し

現品を有して居て、これを賣り繋いて居たものを渡さずに、買ひ埋めてしまふことを掛け外しと云ふ。

搦み

ある一つの相場が、ある時間、例へば百圓を出たり入つたりして、その間に大した差のなかつた時、之を百圓搦みと云ふのである。つまり百圓内外、又は幾圓前後と云ふのと同樣である。

喰合ひ

喰合ひと云ふのは、賣り玉と、買ひ玉とが、取組んだ狀態で、之が相撲ならば四ッに組んだと云ふ處であらう。喰ひと云ふのは、儲ける又は儲けと云ふ意に用ゐられるのであるから、双方で儲けやう、即ち勝たうとして、相組む狀態を喰合ふと云ふのであらう。

逆鞘

逆鞘は、順鞘の反對で、長期のものが高かるべき筈であるのに、それが期近のものよりは安値を付けると云ふ狀態を逆鞘と云ふ。この場合は、順鞘とは逆に、長期のものを買ひ、期近のものを賣つて、その間の鞘をせしめると云ふことになるのである。

合百

合百は、我國では法律上認められない米相場の方法で、之を簡單に說明すれば期米市場の立會の一番終りの先限の値段によつて、賣り方と買方とが、相對の賣買をすることである。尙之を悉しく云へばその時の先限相場が參拾圓であつたとしてそれが上ると見込んだものが買ひ、下がると見込んだものが賣る、その約束が出來た處で、さてその次の先限の相場が、參拾圓から壹錢でも貳錢でも昂つたとすれば、買方は卽ち當つた人は先に約束した額の全部を利得する事になり、又參拾圓から參錢でも貳錢でも下がつた時には、買方が全部を損失するのである。

合百はその幅が、以上の如く單一で、又全然單獨に行はれる事のないものである許り

でなく、更に品物なしの賭博的手段であるために、一時は之を政府でも嚴重に取締つたが、今に絶滅する事が出來ず、殆ど米屋町に於ては公然行はれてゐると云ふ現狀である。

小口大口

小口と云ふのは、幾百とか幾千とか纏まらぬ賣物や買物のことで、大口とは大きく纏まつた賣買物を云ふのである。つまり、小口の賣物多しと云へば、二十とか三十とか、端數の賣物の多かつた事を云ひ「大口續出」とあれば、幾百幾千と纏まつた大きな口の賣物や買物がたくさんにあつた事を表はすのである。

鞘取り

鞘と云ふのは、いはゆる値鞘で、賣りと買ひとを上手にやつてその間に生ずる利得の事を云ふと思へばよい、從つて鞘取りと云ふのは、現物でも、或は定期の期近を買つて、一方には定期の先限(先物)を賣り、この間の値鞘で、金利よりは何程かよい利得をなさうとして、商ひをする事を云ふのである。

採算

採算とは、算盤をとると云ふ事、卽ち時の相場と、金利とを算盤ではじいて見て、賣つた方が有利であるとか、買つた方が有利であるとか云ふ樣な場合のこ

とを採算すると云ふのである。例へばA株の次期の配當が一割として、時價は拂込の程度であつた場合の如き、利廻りは九朱又は一割にしかあたらぬので、それよりはA株を賣つて、時價が拂込よりは十圓方も安く、然も配當は同じく一割であると云ふB株を買つて置いた方が有利とあると考へる事などを採算と云ふのである。

順鞘

順鞘とは、定期市場に於て、期近のもの、卽ち當限よりは、長期のもの、卽ち先限のものが高値で取引される場合のことで、つまり期近のものを買つて、先限りを賣り、その間の鞘が相當の利得となる狀態、または その事を順鞘と云ふのである。

處分投げ

處分とは、自個の所有物を處分する事の處分で、投げとは、値段の高下に拘はらず、投げ出す事の投げである、卽ち處分投げは、損得を考へずに、賣買して居た株でも米でも、投げ出して相場を中止する事を云ふのである。つまり前途何等の望みのない許りか、この上持續すれば、益〻損失を重ねると思ふ場合、一定の期限の

到來を待たずに處分して了ふ事を云ふと思へば間違ひはない。

仕掛け　買ひでも賣りでも、客がはじめて取引店へ註文を發し、買附けまた賣附けをすることを仕掛けと云ふ。その場合には、規定の委託證據金をその取引店にをさめる事を要する。

新甫　新甫とは、讀んで字の如く、新たに甫まると云ふ事で、毎月毎月の發會の際、はじめて生れた先限のことを云ふのである、從つて新甫市場と云へば、新たに甫まつた先限の立つた市場の事である。

商談　物品を賣買する時に、その價格や、取引の方法等の交渉を相互の間に試みる事が、商談である、即ち「商談あり」と云へば、賣買の交渉のはじまつてゐる事を云ひ、「商談まとまる」と云へば、賣買の相談がまとまつた事である。

新規買　新規買は、新しい買物の現はれる事で、つまり、相場が下落した場合等に、その前途高を見越して、新たな買手の、現はれる事を云ふのである。その場

合、不況の市場が、やや生氣を帶びる事は勿論である。

建玉　建玉とは、賣りでも買ひでも、仕掛けたままになつてゐる、即ち相場にかかつてゐる處の玉のことを云ふ。悉しくは「玉」の項を見られよ。

丁　丁は丁度で、幾圓と端したのつかない相場が出た時に、幾圓丁、即ち幾圓ポッキリと云ふ意に用ゐられる。

突立ち賣り　突立ち賣りと云ふのは、例へば株にして、その時代に於ける新高値が出た處を、一氣に賣つて見ることを云ふのである。

繋ぎもの　株でも米でも、現品を持つて居るものが、賣り繋ぐのを「繋ぎもの」と云ふ、つまり現品をもちながら賣つて居るからと云ふ意であらう。

强氣　强氣とは、弱氣と云ふ言葉があつてはじめて存在する言葉であつて、常に買ひ一手で進まうと云ふ意志を云ふのである。即ち買ひ方である、弱氣はその反對の賣り方である、從つて强氣筋と云へば、買ひ方專門で行く處の一味の人人を云ふので

この強氣筋は如何なる場合でも、弱氣筋が存在する限り、如何に相場が高い時でも、なほ以上の高値が出ると云ふ考へを以て、存在するのである。

手仕舞　手仕舞は手詰めと同じ義で、賣つて居る玉、買つて居る玉を、儲かつたか損をしたか、またはその他の理由で、一先づ仕舞ふことを云ふのである。

手詰　手詰は、賣つて居る玉、建つて居る玉、卽ち市場に建つて居た相場を仕舞ふことで、手仕舞と云ふのと同樣である、相場師仲間では、頗る緣起をかつぐのでやめるなど云ふ言葉を決して使はぬ。

天井相場　天井相場とは、經濟界の狀態より考へ、ほとんど昇りつめと思はれる處の値段の現出、それを云ふのである。卽ち最高値の出現と云ふ意味である。

ドタ　相場が何十錢又は何錢と端下の付かぬ値段となつた時、何十錢ドタ、何錢ドタと云ふ、何圓丁度又はそれを略して、何圓テウと云ふのと、ほぼ同じ義である而して何百圓とか何十圓とか云ふ時には、これを大ドタと呼んで居る。

ドテン　買つて居たものが、その全部の玉を賣つて了つたのみか、更に餘分に賣り越すこと、並びに賣つて居た者が、賣つて居た以上に買つたことを、ドテンと云ふ。この言葉は、ドタなど云ふ言葉と共に、その出所が不明であるが、昔から使用されて、通り言葉となつて居る。

解合　解合とは、賣買何れにせよ、建玉を市場で買戻し又は賣り戻しせず、賣つて居る人と、買つて居る人とが、私上の相談の上、一定の値段によつて、互にその建玉を落して仕舞ふことである。卽ち相場に急激の變動のあつたりした時などに、一方が深海に陷らない樣に、またその爲め、市場に影響を及ぼさぬ樣にする方法である。

どうじ　どうじは、前のと同じ。同上と云ふ言葉と同じである。はじめは同上と云つたのだらうが、何事も簡潔を貴ぶ市場の常として、どうじようの「よう」をとつて「どうじ」と讀んだのであらう。

難平

買つて居た處、相場が次第に下落した場合、又は賣つて居た處、相場が次第に上騰した場合、卽ち損になつた場合に、買ひ方は、下落したのを追うて更に買ひ進み、賣り方はその騰貴したのを追うて賣り進み、その損を平均させやうとすること を「難平」と云ふ。難は、いはゆる御難で、損したこと、つまりその難を平らにすると云ふ意であらう。

投げ

投げは利喰とは反對に、買つて居た玉を、損して手仕舞ひすることを云ふ。賣つて居た玉を損して手仕舞するのは煎れと云ふ。

乘り替

賣買何れでも、期近になつた玉を受けもせず、また渡しもせず、何れも手仕舞ひをして、先限に、賣り又は買ひ替へる事を乘り替と云ふのである。

早耳筋

早耳筋とは、市場に於て相場に變動を與ふべき材料を、他人よりも早く耳にすることの出來る人を云ふのである。例へば政府が公債を發行するに決したことを聞き出して之を市場に報ずるが如き、またはある會社が、他の會社と併合するの

議を逸早く尋ね出すが如き、それ等の人を早耳筋と云ひ、同時にこれを他人に通知して多少の利得にあづかるものを云ふのである。

配當落ち

配當落ちとは、株式の賣買の場合、近日配當せらるべき配當金を受取るべき權利を賣主の手におさむべきか、又は買主の手におさむべきかと云ふ樣な事になつた折に、賣主の手、卽ち今までその株を所有して居た人の手に、その受取權をとどめ、株のみを賣渡すのを配當落ちと云ふ。この場合は、配當付と配當落とによつて、その賣買の値に差異のある事は云ふまでもない。

俵括り

米相場に於て、買方が賣り方の渡すべき米のないことを見すかして、無理に受米をしようとする事を「俵括り」と云ふ。卽ち敵の弱點を見極めて、味方を有利にしようとする、四十八手の一つである。

引跡

清算取引に於ては、規定の立會がすんだ後、卽ち引けた後は、賣買をなすことが出來ないこととなつて居るが、仲間同志で、閉場後にも賣買する習慣があり、

即ち跡氣配によつて、相應に取引せられるのである。それを引跡と云ふ。これは現行法では、嚴重に取締ることとなつて居るが、この市場には、法律の力も及ばず、依然として默認の形である。

保險賣　米相場に於て、保險賣又は氣預賣と云ふ方法があるが、それは商品を仕入れると同時に、一方定期で賣置き、仕入れた商品が下落をしても、下落した丈けは定期の方で儲け、損得を平均せしめると云ふ方法である。

曲り　曲りとは、損をしたことを云ふ。市場では、損得などを露骨に表はさぬ事を習慣として居るので、かう云ふ言葉が出る。

戻り賣り　一度安い處があつて、更にそれが引き返して來たので、そのいはゆる戻つた處を賣ることが、この戻り賣りなるものである。

闇相場　闇相場の闇は、定期市場が休會で、いはゆる明りのないと云ふ意で、即ち現物賣買より他は相場が立たぬ爲めに暗がりで相場をすると云ふことである。

弱氣　弱氣とは、賣り氣である。即ち一方に強氣(買ひ氣)があつて弱氣が存在するので、どんな場合にでも常に賣り方に廻らうと云ふ意志である。つまり相場が下落をするだらうと思ひ、または下落を希望したりする處の意志で、弱氣筋と云へば、或る時の相場に對して賣り方に廻つた人人、又は常に賣り方として立つ處の人人を云ふのである。

弱材料　市場には、常に強氣と弱氣とがある。弱氣は相場が下落することを欲し、または下落するだらうと思つたりする事を云ふのであるから弱材料とは、相場を下落させる爲めの材料と云ふ意である。例へば米國の棉花安が傳はつて、紡績株が下落に向ふなどの時、その米棉安を弱材料と云ふのである。

利喰　利喰ひと云ふのは、賣でも買でも仕掛けてあつた玉を、儲けて手仕舞ひする事である。

思惑

思惑は、景氣が上向き、將來に品物が高くなるだらうとの見込みで、多少無理をしても賣買の契約をする事で、財界好況の際の一現象である。而して思惑熱と云ふのは、實際の實力がなくして、賣買の契約をしたりすることが盛んになつて、誰も彼もそんな事に沒頭するのを云ふ。大正七八年から九年にかけての我財界は、この思惑の流行で、一頻り大騒ぎであつた。而してこの事は、相當目鼻が立てば、一攫千金の夢を見る事は出來るが、普通はづれる事を原則とするから、決して堅實な遣り方ではない。

市場の寵兒

市場の寵兒と云ふのは、市場に於ける銘柄中常に人氣があつて、賣買の盛んに行はれるものを云ふので、つまり株式市場ならば高下が餘り甚だしからず、利廻りがよい株を云ふのである。

時價

時價と云ふのは、株なり米なりの、その時の相場のことを云ふ。例へば、大正十二年一月四日の鐘紡株の時價と云へば、一日中の最高最低を平均した中値、

卽ち貳百八拾五圓と云へばよい。但しこの時價も、市場に於て現物で賣買しようとする時には、賣るのと買ふのとは、多少差異が生ずる事があり、それは賣る方には仲買の手數料なるものを課せられる等の爲めである。

七　新聞相場欄の文字

新聞や雜誌の相場欄を讀むと、その日その時の相場の狀況を知るのに、特殊の文字が使用せられて居る、然し大抵は、その字その儘の意味によつて判斷せられるが、その主なものに就て、說明を加へて置かう。

環境

環境と云ふのは、讀んで字の如く環る一帶の地で、卽ち市場の周圍、その時の狀勢、市場一帶と云ふ意である。最近よく環境不良とか、環境不安とか云ふ言葉が新聞に使用せられる。

米棉安

米棉と云ふのは、米國から輸入せられる棉花の事である。從つて米棉安と云ふのは、米國棉花の相場が安いと云ふ事で、この場合は、我國の綿絲市場も安い相場が出るのを普通とし、これが又株式等にも響き、いはゆる株安を現出する事がある、

蓋し世界の經濟狀態が、漸次密接となつて、世界的に動いて居る商品の高下は相場界にも、今は眞に過敏に影響する樣になつて居る事を物語るものである。

不安圈內

相場の變動が甚だしく、相場がおちつかぬ狀態。それの續いて居る間を不安圈內にあると云ふ。卽ち不景氣のドン底に陷つて、相場は低落に低落を重ね、いつ果つべしとも見えぬ狀態を、普通に不安狀態と云ふが、その狀態にも、或る一定の範圍が考へ得られる譯で、それを市場では不安圈內と云つて居る。

新安値

株でも米でも、一度安値が出來て、それより常に上向いて居た處、何等かの原因の爲めにその安値よりは、更に低位の安値の出來た時、之を新安値と云ふのである。

寸進尺退

寸進尺退は、字の如く一寸二寸づつ進んだ——卽ち高くなつた——かと思ふと、一尺も二尺も一度に退く——卽ち安く——なると云ふことで、つまり經濟界不振の際、市場に現はれる常態の形容詞である。

安納會

納會は、その月の終りの日の相場を云ふ。卽ち當限の最終日。それがすむと受渡となるのであるが、安納會と云ふのは、その日の相場が安かつた事を云ふのである。

形勢觀望

形勢觀望は、市場の形勢が不良の時、又は上向くか下向くか容易に判斷のつかない場合に、手をつけずに形勢を觀て居ることで、十分にやる氣勢でありながら、手の出ぬ事を云ふのである。

氣配軟弱

大引後、または止あとの氣配が、下向きで、氣勢あがらぬことを云ふ。

小往來

財界不況の際に、相場があがりもせず、と云つて下りもせず、人爲的の材料等で、少しづつの上り下りをする事で、保合と云ふ程ではなく少しく動いたと云ふ位の程度の動きを、小往來と云ふのである。

小高下

例へば前場に於ける米相場が、一高一低定まる處なく、而もその高低が極く小額であつた時のことを小高下と云ふのである。つまり大した變化のな

かつた事を表はす爲めの言葉である。

ボンヤリ

ボンヤリは、相場の狀態を形容する言葉で、つまり市場が晴晴しからず、上る事もなく、下るにも非ずと云ふ場合の形容詞である。鈍狀と云へば、暗雲低迷に近い時の重くるしい狀態であるが、ボンヤリはそれ程でもなく、兎に角市場が一向氣乘りのせぬ事である。而してかかる狀態は、不景氣、不況時代の通有性である。

小擡げ

小擡げは、今まで沈衰しきつて居た相場が、何等かの好材料によつて、少しく動きはじめたこと卽ち少しく頭を擡げた事を形容して云ふのである。但し小擡げがあるから、大擡げがなくてはならぬ譯であるが、大擡げと云ふ言葉は使はず、その時には昂騰とか、暴騰とか云ふ言葉を使ふ。

小康

小康は、今までに上りつづけて居た相場、又は下りつづけて居た相場が、その上り又は下りの步調を、暫く停止して、一休をする狀態、いはゆる不安圈內から、一時免がれた形勢を云ふ。小休と云ふのは、不安圈內にありながら、一時休む

ことを云ふので、小康とは少しく意味が違ふ。

小休　小休は、相場が上へでも下へでも、變動が甚だしく、人心不安に陷つて居る際、一時その變動を中止する狀態を云ふのである。その小康と異なる點は、小康は、一時兎も角も、不安圈内を脱することであるに反し、小休は不安圈内にありながら一休すると云ふ點である

小戻し　小戻しとは、一たん低落した相場が、何かの新材料——例へば新規の買物等の出現したが爲めに、下がるのを中止して、少しく引かへして、些か戻り値の出來た事を云ふのである。更に委しく説明すれば、前日の大引で、七拾圓であつた郵船株が、翌日の寄付に七拾圓參拾錢と建つた時の如き、これを小戻しと云ふのである。

小緩み　小緩みと云ふ言葉は、普通は、金融界の狀勢を形容する時に用ゐられる。即ちお金が需要よりも供給が大きく、銀行家の手許に遊んで居る金、即ち遊金の多い場合、それを小緩みと云ふ。

尙市場での「小緩み」は、相當警戒が解かれて多少狀勢の緩和した時の形容詞である。

小動き　小動きは、相場が少しばかり動いた事を云ふので別に意味はない。

崩れ　崩れと云ふのは、相場が下落することであるが、然し嚴格な意味で云へば、崩れは普通の下落とは異り、ある品物が、或程度の値段を保ち、それ以下には下りさうに見えなかつたに拘はらず、それを押しきつて下落した事を崩れと云ふのである即ち賣崩しと云ふが如く、人爲的手段を以て、賣つて賣つてその値を下落せしめた場合を云ふのである。

不勢　不勢は、活氣あがらず、または勢ひあがらずと云ふ意味。商内も少なく、また人氣もあがらずと云ふ場合を形容する言葉である。よく綿絲界不勢、米界不勢などと云ふ。「不振」といふ言葉と同意味ではあるが、氣勢あがらずと云ふ場合には、不勢といふ語を用ゐる樣である。

關門割れ

相場には別に一定の關門がある譯ではないが、例へば、東株の如き、大株は普通の場合百圓以上をして居たとする。即ちその百圓と云ふ點を、假に關門と呼んで、それを割つて九十幾圓となる事を關門割れと云ふのである。鐘紡の如き、大正十二年に貳百圓を割つた時、市場では之を關門割れと呼んで大騷ぎをした。つまり株でも米でも、一定の標準を關門としやれる譯である。

商狀重し

商狀重しと云ふのは、商内の狀態が前途に見据ゑがつかず、暗雲低くたれて、何となく活氣がない、即ち氣合が無い——と云ふ樣な場合を形容する言葉である。

諸株區區

諸株區區と云ふのは、いろいろの株の値が、まちまち——即ち思ひ思ひで或は高く或は安く、高歩調とか、安歩調でない場合の形勢を形容した言葉。

軟風競ふ

財界が安定せず、總體に於て悲觀論に終始して、買方賣方共に少しの活氣もなく、意氣銷沈の狀態を、軟風競ふと云ふのである。つまり財界不況の

どん底を形容したもので、僅かばかりの好材料が出現しても、何等の動きを示さない狀態を云ふのである。

底入れ

株でも米でも綿絲でも、それが徒らに軟風競ふで、低落に低落を重ねても、物には自ら一定の底値と云ふものがある。例へば之を郵船會社の株として、會社が一割二割の株主配當を繼續して居る以上、如何なる場合があつたとて、拂込以下に値がさがると云ふ事はない筈である。即ち値が低落に低落を重ねてその一定の底値——勿論利廻り等を計算すれば、誰にも首肯せられる値が出る——に達したのを「底入れ」と云ふのである。これは財界不景氣のドン底の際の現象である。

下放れ

下放れと云ふのは、一寸飛び放れて安いことを云ひ、上放れと云へば、飛び放れて高いことを云ふ。

下澁る

諸種の事情から、相場が低落せねばならぬ筈であるに拘はらず、容易に下らず、僅かの低落を見た儘なのを下澁る、又はさげ澁ると云ふ、即ち之を紡績

株にすれば、原棉の續落などの惡材料の爲めに、當然相當の低落を觀ねばならぬのに、それが豫定通りに下らず、僅か拾錢とか貳拾錢とか、ほんの僅かばかりの低落を見たのを、相場が下澁ると云ふのである。これは相當の警戒を要する場合で、財界不況の際に、よく現はれる現象である。

保合　保合は、持合とも書く。相場が高くもならず、低くもならず、暫らく何等の變動もない事を云ふのである。例へば東株が前場でも壹百參圓拾錢、後場でも壹百參圓拾錢又は廿錢位の處を往來するのを、東株は保合だと云ふのである。

低迷　低迷と云ふのは、低く迷ふ、卽ち不安の空氣が、市場に漲つて、前途何等の見據るのつかない狀態を形容する言葉である。政界にはげしい動搖が起つた場合、よく「暗雲低迷」と云ふ字が新聞に現はれるが、財界の場合もそれと同し樣で、變動常なく、暫らくその停止するを知らぬ時の事を云ふのである。

鈍狀　鈍狀と云ふのは、その日の相場の模樣が、上るにも非ず、下るにも非ず、まこ

とに晴晴しくない事を云ふので、主としてかう云ふ場合は、不景氣で、市場に活氣がない時であると同時に、暗雲低迷して前途更に悲觀される場合である。

一服　一服とは、俗に云ふ煙草一ぷくで、相場が一息つくことである、卽ち上向きか下向きか、種種に迷ひつつあつた處、その不安がちよつと一時、休息したことを云ふのである。

活況　市場の景況——卽ち市況が、活氣を呈し、賣り買ひの盛んなことを、活況と云ふ。

不振　不振は、景氣のあがらないこと、市場に活氣のないこと、人氣のないことを云ふのである。

閑散　市場がさびしく、閑なこと、卽ち賣り物も、買ひ物も、頗る尠ないことを閑散と云ふ、但し不振とか不況とか云ふのとは違ふ。

氣迷　相場が高くなるか低くなるか、判然せず、ただ一時的に少し上つたりまた少

し下つたりする狀態を氣迷ひと云ふ。

氣丈

氣丈とは、景氣が大丈夫、つまり氣强いと云ふ事で、多少相場が下向きだらうと考へられるにも拘はらず、案外に下向かず依然些少ながらも上向きにあることを、市勢氣丈とか相場氣丈とか云ふのである。

溫味

溫味が廻るは、一般に不況だつた處に、何等かの好材料の爲め、やや相場が上向き加減になつて來た事を、大いに通がつて云ふ言葉である。

高向き

高向きと云ふのは、相場は一進一退であるが、その中にも、多少づつ騰つて行く事を云ふので、好材料があり、景氣が直つて行く場合の現象である。

ヂリ高

ヂリ高は、ヂリヂリと高くなることを云ふのである、昨日よりも今日は高く、今日はまた前場より後場が高いと云ふ風に、小額づつであるが、ヂリヂリと騰つて行く相場のことを云ふのである。高向きと云へば、單に騰るらしい狀態、又は、多少の高下をしつつ然し高くなつて行く場合を云ふが、ヂリ高は、下る事なしに、ヂリ

ヂリと高くなつて行く事を云ふのである。然し昂騰や、暴騰の如く强く、また猛烈ではない場合である。

昂騰

昂騰は、急激に高い相場になることを云ふので、例へば百圓の株が、百壹圓となり、更に貳圓となり、四圓となり、遂に百六圓七圓となる場合を云ふのである。騰がるのを形容する言葉のうちで、奔騰・急騰・昂騰・ヂリ高・高向き等があるが、昂騰は奔騰よりは弱く、ヂリ高よりは强いのを云ふと思へばよい。

急騰

危騰は、急に値が騰る場合の形容詞である。然し、それも程度があつて、一時に拾圓拾五圓も騰る場合は、奔騰と云ひ、それよりは少ない場合、貳圓とか參圓とか、急に騰つた時の事を云ふと思へば間違はない。昂騰は漸次に高い値が出る事であり、急騰は一時的に急激な値の出る事である。

暴騰

暴騰は、急騰または昂騰と殆んど同じ樣な狀態を表はす言葉で、奔騰よりは、いくらか弱いと思はれる騰貴の場合を形容すると思へばよい。

奔騰　値のあがるのを形容する言葉に、いろいろあるが、奔騰と云ふのは、恰かも奔馬の如くにほとんど想像の出來ぬ位に急激に値の騰る時のことを云ふのである之を値のさがる場合――卽ち反對の場合の言葉にすれば、「慘落」がその對照語であらう

狂騰　狂騰は、字の如く相場が狂人じみた騰り方をした時の形容詞で、奔騰・暴騰などと、同し意味であるが、但し狂騰は、何等の豫想も、また昂るべく考へられなかつたのに、突然大昂騰を見た場合に用ひられる言葉のやうである。

漸落　漸落は、相場が急激に下らず、だんだんに下がつて行くことを云ふので、ヂリ安と云ふ言葉を、漢字で書いたに過ぎない、昂るので、これと同じ意味のは漸騰、又はヂリ高である。

續落　續落は、續いて相場が落ちることを云ふ。卽ち三日も四日も毎日、下がるのみの相場の時これを形容して續落と云ふのである。

暴落　慘落よりは、下落の程度が少ない場合の形容詞を暴騰と云ふ。激落も暴落と殆

んと同し意味に用ゐられるが、ただそれを使ふ人の氣持によつて、激落とも書き、暴落とも書くのである。何れにしても、前日より又は前場よりは下落の程度の激しい場合を表はす爲めの言葉と思へばよい。

激落　相場の下落を表す言葉のうち、その最も激しいのは慘落で、次は激落、又は暴落である、激落は暴落と殆んど同し場合に使用される言葉で、暴落を參照せられよ。

慘落　相場が下落する時を形容する言葉にいろいろあるが、その最も激しいのを慘落と云ふ。卽ち殆んど豫想外の下値を現出した狀態である、暴落・激落よりも更に甚だしい場合を形容する言葉である。

第二　株式市場

一　東西の二大株式取引所

株式取引所は、全國に拾ケ所ある。卽ち東京・大阪・横濱・京都・神戸・名古屋・長崎・廣島・博多・和歌山であるが、その中でも東京株式取引所と、大阪株式取引所とは兩大關で、他は殆んど之に壓倒せられて居る形である。從つて、いざ取引所の問題と云へば、この兩取引所が、自由自在にふるまつて他は手足の樣に操つられて居るのである尤も株と米其他共通の問題が起つて來ると、東京米穀商品取引所、堂島米穀取引所、横濱取引所、名古屋株式取引所、大阪三品取引所、神戸取引所等がいはゆる幹事取引所と

云ふ事で、時たま樞機に與る事は勿論である。

事情右の如くであるために、株式市場と云へば、殆んど東京と大阪とに限られるが如くに考へられ、たとひ株式取引所所在地の都市に於ける相場にしても、東京・大阪の狀況如何によつて、左右せられると云ふ姿である。從つて日日の新聞紙の商況欄は、東京ならば、東京株式市場の狀況、大阪ならば大阪市場の狀況を詳細に報道し、地方の新聞また、東京・大阪何れかの商況を、電話によつて取り、之を報道する事をその唯一の任務として居るのである。

そこで私は、先づこの東西の二大株式取引所に就て、お話しする事としよう。

東京株式取引所

東京株式取引所は、その創立明治十一年五月である。當時の資本金は僅かに貳拾萬圓で、株數は一株百圓の貳千株であつた。之が創立者は澁澤榮一、小松彰、益田孝、小室猛夫、三野村利助、深川亮藏、澁澤喜作等の諸氏で第一回の頭取は谷元道之氏、開業當年の賣買高は、國債僅に貳千六百五十六萬五千四百

圓、株式二百五十三株に過ぎなかつた、十二年十月から金銀貨賣買の事をも開始し、かくて明治廿四年七月に中野武營氏頭取となり、越えて廿六年九月に第一回の增資を行つて參拾萬圓とし、百圓の株券を五拾圓券として株數を六千株としたのが、その發展の第一歩であつた。第二回の增資は二十九年三月で、增加して六拾萬圓となり、第三回は卅年六月で、更に之を增加して壹百廿五萬圓とし、更に卅九年四月には四百萬圓とし四十年三月には一躍して壹千貳百萬圓、大正六年三月、更に强進して貳千萬圓、大正九年六月には四千五百萬圓に達したが、尙十年十二月に證券交換所を買收した爲めに、その上に貳百萬圓を增資して現在に於ては、四千七百萬圓の巨大な資本金となり、その拂込みも、五拾圓拂込み濟の新株四十萬株、(貳千萬圓)拾貳圓五拾錢拂込みの新株五十四萬株(八百七拾五萬圓)合計貳千八百七拾五萬圓と云ふのである。これによつて見れば、當初設立當時百圓を投じて一株の株主となつたものは、現在の親株八十一株、合計百六十二株の大株主となつて居る勘定である。兎も角も株式取引所の事業は、今日の經濟組織

に於ては、必要缺くべからざるものであり、且漸次に膨大し行くものなる事は明瞭であるから、市場に於ては東株は常に獨り採算外れを買はれ、主力株たる地位を保つて居る而して大正十一年下半期以降の配當は大正十一年(下)一割一歩、大正十二年(上)一割六歩、大正十二年(下)七歩であつた。尚大正十二年中及び大正十三年五月までの最高最低を示せば左の如くである。

▽親株(五拾圓拂込濟)

最高	一四七、九〇(四月)	大正十二年中
最低	一〇六、一〇(十一月)	大正十三年五月まで

▽新株(拾貳圓五拾錢拂込)

最高	一一四、九〇(五月)	一一八、五〇(一月)
最低	八三、五〇(十一月)	九一、二〇(四月)

尚親株と新株との値開きは、採算上參拾七圓以上でなくてはならぬが、この狀態を見れ

ば僅かに貳拾五六圓であつて、新株は親株よりも拾貳參圓も上値を買はれて居る。斯くの如きは全然人氣作用で、即ち過去の歴史によつて、東株と云ふものは長く持つてさへ居れば何時かは必ず有利になると云ふ觀念が多くの人の頭に泌み込んで居る結果、新東に向つて變態的に人氣が集中する爲めに外ならぬ。尚理事長は明治四十四年中野武營氏辭任して、男爵鄕誠之助氏之をつぎ、今日に至つて居る。

大阪株式取引所

大阪株式取引所は、大阪北濱にある。現在はその資本金四千五百萬圓内拂込金貳千五百六拾參萬、積立金貳百餘萬圓を有し、東京株式取引所と肩をならべて、東西の二大取引所である。而して、その設立は明治二十六年十一月即ち取引所法の我國に制定せられた時の創設であるが、その以前、東京株式取引所と同樣株式條例による開業が認められ、明治十一年五月以來、株式の賣買取引をなして居たのであつた。當時の資本金は僅かに拾萬圓で實に微微たるものであつたが、明治二十年に株式の賣買漸く旺盛なるに至つて貳拾萬圓に增額し、廿六年取引所法の制定と共に、百

萬圓に增資し、次で明治卅一年に貳百萬圓、同四十一年に參百萬圓と漸次增資して、遂に今日の四千五百萬圓の大會社たるに至つた、現在の理事長は島德藏氏である(大株參照)

其他の株式取引所

東京大阪二大株式取引所の外に、大きいのは横濱、京都が參百萬圓名古屋が貳百五十萬圓、神戸が貳百萬圓、博多が百五拾萬圓で、何れも賣買取引は行はれて居るが、横濱は生絲が主であり、京都神戸は米穀と兼營である等の關係、且資本の小なると地方的なるとの關係により、各取引所共に、全然獨自の値は立たず、東京大阪の雲行によつて相場が立つと云ふ狀態である。從つて以上各株式取引所の相場は、何等兩大市場に影響を及ぼさず、總てがただ單にその市場を圍る商人連の生活機關に過ぎないと云ふ觀がある。從つて東西の兩大株式市場が、益々その光りを放つこととなるのである。

長期清算取引

株式市場に於ける清算取引は、之を長期と短期とに區別せられて居る。長期とは、字の如く比較的長い期限を定めて、その間に差金賣買を許す

處の方法、つまりその間を限つて清算取引を行ふ方法であつて、その期限は二ヶ月である。但し從來の三ヶ月制が大正十四年三月末までは延認せられ、現今は二ヶ月制によつて行はれて居る。長期清算取引は從前の定期取引と思へばよい。

短期清算取引

株式市場に於ける清算取引は、二ヶ月を限度とする長期清算取引と、七日を限度とする短期清算取引との二つに區分される、これは從來の延取引・直取引に多少參酌を加へたものであつて、即ち賣買の契約をしてから、七日間にその契約を履行する事を命ずる處の取引で、受渡しの際、その間の規定の日歩を拂ふことによつて、決濟することが出來ることとなつて居る。

短期取引日歩

短期取引は、七日間だけ、いはゆる日歩を拂ふことによつて受取をのばす事を得る取引の方法であるが、その日歩は、その株のその日の相場の高低によつて之を定めるのである。之を大阪朝日新聞によつてその例を求めれば、左の如くである。

短期受渡と日歩

（二日間）

	日歩	過不足	代引尻
鐘紡	七五	㊥ 八〇	二〇
鐘新	無	㊀ —	—
大株	五四	㊀ 一一〇	一〇五〇
大新	四四	㊥ 九四〇	一七〇〇
郵船	無	㊥ 五〇	—
東新	三八	㊥ 二六〇	七六〇
日糖	四六	㊥ 六〇	一五〇

㊥印過剰
㊀印不定

二　市場の建株

今度は市場に於て、賣買の目的物となつて居る株のことに就てお話しする。

建株　先づ建株の話である。建株と云ふのは、取引所に上場して居る處の、株式會社の株式のことで、それは建株たるべき一定の資格――例へば資本金五百萬圓以上とか、創立後幾年とか、保證金納入とか云ふ樣な資格を具備するを要するが、大正十一年十一月末日の調査によれば、この建株となつて居る會社の數は、全國の取引所に於てその數百六十一社に達し、此の銘柄は二百四十四種の多數に上つて居る。然し其中には、殆んど取引の行はれて居らぬ株式もあるし、また取引されても、稀にしか出來ない株式も少くないので、新聞紙上に現はれる株式高低表には、是等の内、日日最も多く取引される株式、約百種を掲載して居る。今、それ等建株のうちに於て、重要なものを擧

げれは左の通りである。

東京

東京株式、郵船、東洋汽船、大阪商船、北海炭鑛、日本活動、富士製紙、東洋毛斯倫、東京毛斯倫、大日本麥酒、東京毛織、日清製粉、淺野セメント、久原鑛業、日本石油、東京電燈、鬼怒川水電、富士水電、矢作水電、帝國電燈、大同電力、富士瓦斯紡績、鐘淵紡績、日清紡績、東洋紡績、大日本製糖、鹽水港製糖、臺灣製糖、東洋製糖、新高製糖、帝國製糖、明治製糖、日本製麻、帝國製麻、東京米商、大連取引所

大阪

大阪株式、鐘淵紡績、大日本紡績、東洋紡績、合同紡績、富士瓦斯紡績、日華紡織、毛斯倫紡織、東洋モスリン、日本棉花、宇治川水電、大阪商船、堂島米穀、三品取引所、泉尾土地、久原鑛業、大阪鐵工所、阪神電鐵、阪神急行電、大日本製糖、鹽

水港製糖、臺灣製糖、大日本人造肥料、東洋拓殖

以上建株のうちに、主力株とか花形株とか種種の名稱があるが、今それを說明しよう。

主力株

主力株と云ふのは、市場に於て常に多くの取引が行はれて、動きの忙がしい株で、同時に何時でも其株式の騰落が、一般市場の人氣に影響し、遂には他の株の騰落をまで左右する樣な力を以て居る處の株を云ふのである。而してその主力株の主なものは、東京・大阪を通じて、常に兩取引所株や、鐘紡(鐘ヶ淵紡績株)である。

花形株

花形株と云ふのは、もともとこれと云つて定まつたものではなく、その時時に何か問題があつて、取引の盛んなものを云ふのである。大正十一年の秋頃淺野セメントが一時東京市場の花形株であつた事があるし、世界戰爭中は汽船株が花形株であつたが、近來は、紡績株や、製糖株が花形となつて居る。

株式の種類

尙以上の建株の中に於て、その會社が中途に於て、資本額を增加した爲めに、同じ會社の株式で二樣の株式がある事がある。卽ち東京株式取引所株

に、舊株と新株との二つがある樣なものである。

舊株　舊株と云ふのは、會社が資本金を增加した時、新しい株を發行するが爲めに、二樣の株が市場に出るについて、その株の種類を明瞭にする必要から、先きに發行せられた株を、舊株と云ひ、新しい株を新株と、云ひならはして居るのである。從つて相場表にそれが出る場合には、例へば「鐘紡の舊」とか、「鐘紡の新」とか云ふ風に云ふのである。尙序に說明して置くが、會社が新株を發行する時には、必ずその株式が全部拂込まれて居る卽全額拂込でなくてはならぬのであるから、舊株と呼ばれる場合は悉く全額拂込の株と承知してよい、人によつてはこの舊株を親株とも云ふ。

親株　親株は、同じ會社の株式に二樣又は三樣ある場合、卽ち資本增加の結果、新株が發行せられた場合に、それを子株と云ふに對して俗に基礎株を目して云ふ言葉で、普通には之を舊株と云ふのである。

新株　相場取引の際に用ゐられる新株と云ふのは、普通に云ふ新たに發行せられた

株と云ふのではない、卽ち、舊株あつての新株で、會社が資本金を增加——增資して、第二の株を發行した場合、その株が新株と云はれるのである。舊株を親株と呼ぶ事から一名子株とも云はれる、而してその舊株と異なる點は、新株は、配當その他に對して優先權を有する事である、從つて通常の場合、新株の取引上の價値は、必ず舊株よりは割高である。

次に市場に於ては、以上の建株に對して總括的の名稱を附して之を呼ぶ事がある、またその種類によつて名稱を附すことがある。

割安株　割安株と云ふのは、拂込額や、配當に比較して時價の割合に安い株や、卽ち實質がよくて値が高くはなく、比較的買ひ安い株のことを云ふのである。最近に於ては日本電力の如き、貳拾五圓拂込、配當六朱であるのに、六月初め（大正十三年）の時價は九圓四拾錢と云ふ樣なのを云ふのである。

投機株　投機株は、投機を目的として營まれる會社の株である、例へば取引所株の如き、また土地株の如き、信託株の如きである、而して株式市場の相場がすでにこの投機である事から、これ等投機株の消長は、財界全體の景氣に關するので、この消長に注目を怠つてはならぬ。

浮動株　浮動株と云ふのは、市場の形勢によつて、常に左右せられて、上つたり下つたりする處の株のことである。凡そ總ての株が、市場の形勢に左右せられて消長を免がれぬのは否定することの出來ぬ現象であるが、然し何等か相當根據のある株主、單なる市場の形況のみによつては決して左右せられぬのを原則とする。從つて一般的浮動株と云ふのは、常に波の間に動いて居る株のことで、決して一流株ではないのである、然しこの浮動株をうまく使ひこなせば、一流株を扱ふよりも、面白い利益を占める事がある。

端株　端株は、はした株、卽ち主力株以外の總ての株を云ふ。雜株と云へば、中に郵

船株の如き主力株もあるが、要するに端株は、雜株中から主力株を除いた外の、はした株と云ふ意味である。

雜株　雜株と云ふのは字の如く雜種の株で、取引所株とか、紡績株とか、船株とかの株とか、製鋼會社の株とか、久原の株とか、銀行の株とか云ふのがそれである。

不良株　不良株と云ふのは、讀んで字の如く、あまり良からぬ株で、之を廣義に云へば、配當が多かつたり、少なかつたり、または全然無かつたり、または何か問題が起りさうな會社の株式のことを云ふのである。

紡績株　紡績株は、取引所株と共に、市場の大立物で、殊に鐘紡(鐘淵紡績會社株)の如きは、東株(東京株式取引所株)大株(大阪株式取引所株)と共に、東西兩大取引所の主力株となつて居る程である。尙その主なものは、大日本紡績、東洋紡績、合同紡績、日清紡績、富士瓦斯紡績等で、何れも市場の大立物である。

船株　船株は、汽船會社の株である。而して市場で云ふ處の船株は、郵船(日本郵船)商船(大阪商船)汽船(東洋汽船)を、その主なものとし、日清汽船、國際汽船等を云ふのである。郵船・商船は取引所株や、紡績株等に次ぐ花形株であるが、それも海運界の盛衰如何によつて活氣の度は大に違ふのである。

砂糖株　市場で云ふ砂糖株は、砂糖會社の株式の事である。砂糖會社には、精糖會社と、甜菜糖會社等とがあるが、市場にかかつて居るのは主として精製糖株で取引所株、紡績株等に次で、市場に活躍する花形株である。その主なものは大日本製糖、東洋製糖、明治製糖、鹽水港製糖、臺灣製糖、新高製糖等である。

土地株　土地株は、土地の賣買、仲介、經營を目的とする會社の株式で、歐洲大戰の好況以來、土地熱が旺盛となつた結果、一時東西に簇生したのであつたが、近來は餘り振はなくなつて、株式の賣買も餘り目に立たぬ、而して土地株中、盛んに活躍して居るのは、大阪市場に上場せる泉土、港土、市土の三つで市場ではこれ等を土地

株と呼んで居る、東京市場に於ては土地株は頗る氣勢昂らぬ。

取引所株　取引所株と云ふのは、普通に東株、即ち東京株式取引所の株式、大株即ち大阪株式取引所の株式を云ふ。勿論全國に三十餘を算する取引所があるので、それも同樣取引所株と云はれるが、市場で賣買せられるのは、殆んど以上の二大取引所株及び堂島米株、米商株(東京米穀商品取引所)等に限られる觀がある許りか、東京市場に於ては東株、大阪市場に於ては大株等が、主力株であつて、且常に大勢を支配する狀態である。

一流株　一流株と云ふのは、花形株とか、主力株とか云ふのとも異ひ、拂込額よりは時價の常に幾倍か幾割かの上を保つて、いはゆる事業會社として一流に位する成績を擧げて居る會社の株を云ふのである。即ち鐘紡の如き、明治生命株の如き、日本銀行株の如き、郵船株の如き、滿鐵株の如きものである。

事業株　事業株と云ふのは、紡績とか製糖とか、又は電氣・製紙等の事業會社の株の

ことである。事業株の中に於ても、消費の確定せるものや、(紡績・製糖・製紙)人口增加の爲め確實な收益あるもの、(電鐵・水電)などは、殊にその事業の堅實なるがために信用がある、然し市場で普通に云ふ事業株は、電氣又は鐵道・製鐵等である。これは紡績は紡績株と云はれ、製糖株は、砂糖株と云はれ、石炭・鑛業等は鑛業株と呼ばれる爲めである。

其他電氣株・電鐵株・鐵道株などと種種あるが、それは省略する。而して次には日日の新聞に現はれる株式相場表や、株を賣買しようする人の心得べきことをお話しよう。

株式相場表(高低表)

株式取引所の清算取引の仕方は、規定の競賣買で、その立會は、日に四回、卽ち前場寄付と大引、後場寄付と大引であるが、更に長期清算取引に於ては先頃まで當・中・先の三月制を尙採用(大正十四年四月一日から、當・先のみの二月制實行)して居た。

株式相場表は、毎日の相場を一枚の紙に表出して、その日の高低を示すものであるが各取引店で悉く之をお客に配付するから、それを見たいと思ふ人は、取引店に申込めば何時でも送つて呉れる。尙、新聞にもこの相場表は、必ず掲出されて居るから、それに就て見ても、およそのことはわかる。

株賣買の心得

右相場表に當・中・先とあるは、當限・中限・先限の略語で、重複するが之を更に說明すれば、當限はその月末に處分すべきもの、中限は翌月末に處分すべきもの、先限は其翌翌月末に處分すべきものである。而して我我が若し株の賣買を清算取引に於て、やらうと思へば、この何れの期限で賣買するも隨意であるがこの賣買した限月の月末受渡し日の前日までに賣つたものなら渡株をする。買つたものなら受株をせなければならぬので、これが卽ち受渡(三三頁參照)であるが、その場合に於て、我我が受渡を欲しないならば受渡の日まで、轉賣買戻しをして、建玉を落して了はねばならぬ、又若し建玉を殘して置きたいと思ふもの——例へば當月限に買玉があ

つたとすれば、之れを其月の受渡し前日迄に轉賣をして翌翌月(先限)で買ひ置けばよい又賣つて居たものは此の反對をやればよい。卽ちこれが「乘替へ」六〇頁參照)なるものである。而して淸算取引に於てはこの受渡をするものは極めて少なく、第一章取引所の收入(一五頁參照)の中に於ても述べた如くに、全國各取引所の大正十年に於ける、賣買契約高は五千九百八萬五千株であつたに拘はらず、そのうち受渡しをなしたのは、僅かに六百二十五萬七千株にすぎず、實にその十分の一にもあたらないのである。この現象は、淸算取引、卽ち以前の定期取引が、受渡しをせずに、その中途に於て轉賣、買戻しをやつて居る事が、頗る明瞭するわけである。

三　主な株式の說明

東京大阪兩取引市場の建株となつて居る株式の中に於て、賣買取引の盛んに行はれる銘柄に就て、簡單に、その會社の狀態や、相場の模樣などをお話ししよう、銘柄の呼び方は主として東京は『東京朝日新聞』に大阪は『大阪朝日新聞』による。

但し資本金・拂込金・積立金は大正十一年末・配當は大正十三年六月現在前期のものである。

紡績

鐘紡は鐘ヶ淵紡績會社である、明治廿年の創立で、現在の資本金壹千八百拾貳萬七千圓、拂込金壹千六百四拾八萬六千圓であるが、その積立金貳千八百四拾參萬八千圓に達し、我國に於ける紡績會社の最大なるものである。資本金から見れば、大日本紡績(五千百萬圓)東洋紡績(五千萬圓)富士瓦斯紡績(四千五百萬圓)片倉製絲(五

千萬圓)等があるが成績に於ては鐘紡に遠く及ばぬ。從つて鐘紡の地位は、獨り紡績王たる許りでなく、全國の事業界に於ても主きをなし、その株式の如きは、東西兩取引所に於て、兩取引所株と共に、主力株として、全相場を左右するの狀態に在る。而して配當は大正十二年上半期六割、下半期五割八分で、同年に於ては兎も角も我株界の配當頭であつた、今その相場を表出すれば左の通り。

(舊株)	最高	最低	(新株)	最高	最低
	(五拾圓拂込)			(五拾圓拂込)	
大正三年	一〇八、五〇	八七、一〇	大正三年	八二、九五	六三、〇五
大正九年	五七四、〇〇	一八四、〇〇	大正九年	五五三、一〇	一六六、五〇
大正十年	四一八、〇〇	二二五、九〇	大正十年	四一七、一〇	二一〇、一〇
大正十一年	三六二、三〇	二六九、〇〇	大正十一年	三五七、四〇	二四八、八〇
大正十二年	三二三、〇〇	二八五、六〇	大正十二年	三一四、九〇	二五五、八〇
大正十三年(上半)	三三六、九〇	一六八、一〇	大正十三年(四月迄)	三三四、二〇	一六七、八〇

富士紡 富士瓦斯紡績會社のことである、同社は明治二十九年三月の設立で、現在資本金四千五百萬圓(拂込貳千七百九拾五萬圓)で、積立金壹千五百八拾壹萬壹千圓を有し、鐘紡に次ぎ、東京方面に於ける大紡績會社である。大正十二年中に於ける配當は、上下共一割二分(大正十三年上も同樣)で、その親株の近年に於ける高低は左の通り。

	最高	最低
大正三年	七八、六五	五七、〇〇
大正九年	三一四、五〇	七八、〇〇
大正十年	一二六、三〇	九二、六〇
大正十一年	一一四、九〇	八一、五〇
大正十三年	一一一、〇〇	六〇、九〇
大正十三年(上)	七〇、五〇	五一、六〇

日清紡 日清紡績會社のことである。會社は明治四十年一月の創立で、資本金壹千百萬圓(拂込七百七拾萬圓)積立金四百卅五萬五千圓(十一年六月現在)會社は新しいが、東京市場に於ては花形會社の一で、直取引の許されて居た時代には、特に活躍

したものである。配當は大正十二年上二割五分、下一割二分(大正十三年上は一割六分)で、その株式の最近の値は左の通り。(拂込四拾參圓)

	最高	最低		最高	最低
大正三年	一七、七〇	七、九五	大正十一年	一一九、三〇	七二、七〇
大正九年	二三二、五〇	六四、〇〇	大正十二年	一〇五、七〇	七六、二〇
大正十年	一三一、四〇	八六、一〇	大正十三年(上)	九一、一〇	六九、一〇

東洋紡 東洋紡績會社(大阪)である。設立は大正三年六月で、大阪に於ける數會社の合同から成る現在資本金五千萬圓(拂込參千百貳拾五萬圓)で、積立金參千貳百參拾五萬圓に達し、鐘紡に次で大紡績會社である。配當は大正十二年中上下共二割五分(大正十三年前期も同樣)株式高低は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
(五拾圓拂込)					
大正九年	三五二、九〇	八三、一〇	大正十二年	一三九、六〇	一〇六、二〇

大正十年	一六八、〇〇	一〇七、五〇	大正十三年(上)	一二七、〇〇	一〇九、五〇
大正十一年	一四五、六〇	九九、二〇			

東京モス(東モス) 東京モスリン紡織會社のことである。東京に本社を有し、明治廿九年三月開業、現在資本金は壹千五百萬圓(拂込壹千貳百八拾貳萬圓)にて、積立金五百四萬八千圓を有し、大阪の毛斯綸紡織會社、東洋モスリン紡織會社と優劣を爭つて居る。配當は大正十二年上二割四分、下一割五分、大正十三年上一割四分である。その近年の株式値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
(五拾圓拂込)					
大正三年	五二、〇〇	四二、五〇	大正十一年	九六、五〇	六二、八〇
大正九年	二〇九、九〇	六二、一〇	大正十二年	一〇九、三〇	六二、〇〇
大正十年	一一八、五〇	六八、〇〇	大正十三年(上)	七三、四〇	四七、一〇

東洋モス(洋モス又ハ洋毛) 東洋モスリン會社の事である。明治四十年一月の開業、東京に本社を有し資本金壹千八百萬圓、内拂込壹千六百貳拾

五萬圓、積立金貳百貳拾參萬參千圓に達し、大阪の毛斯綸紡織東京の東京モスリンと、我三大モスリン會社と稱せられる。配當は大正十二年上三割五分、下一割八分、大正十三年上同斷にて、近年の株式値段は左の通り。(五拾圓拂込濟)

	最高	最低		最高	最低
大正三年	四〇、九〇	二二、一五	大正十一年	一二八、四〇	八二、七〇
大正九年	二九八、〇〇	七二、九〇	大正十二年	一〇八、九〇	六八、〇〇
大正十年	一四〇、四〇	六三、〇〇	大正十三年(上)	八四、七〇	五五、三〇

郵船

日本郵船會社のことで、我國第一の汽船會社である。設立は明治十八年十月、資本金壹億萬圓、内拂込五千八百萬圓、積立金七千九百五拾壹萬貳千圓に達し所有船數八十隻、歐洲・米國・濠洲の三大航路に就航し、財界の一大王國をなして居る配當は大正十二年中上下共に一割、十三年上又同樣で、その近年の株式値段は左の通り。(但し大戰前後にはこの株は大活躍を見たものである)

	最高	最低		最高	最低
大正三年	一二一、九五	一〇二、九五	大正十一年	一三八、七〇	七八、〇
大正九年	二五一、三〇	一二五、〇〇	大正十二年	一〇七、七〇	八二、二〇
大正十年	一五二、七〇	一二一、三〇	大正十三年(上)	八九、四〇	六八、一〇

汽船

東洋汽船會社のことである。明治二十九年七月の創立で、淺野總一郎氏が當初以來の社長である。資本金參千貳百五拾萬圓、内拂込貳千貳百七拾五萬圓で、積立金は六百六拾參萬七千圓、成績はあまり良好ではないが、我國に於ては、郵船、商船に次ぐ汽船會社である、配當は、最近缺損のみで、日本郵船との合併説などがある。株式値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
(五拾圓)					
大正三年	三四、二〇	一六、二〇	大正十一年	三三、四〇	一九、一〇
大正九年	八九、九〇	三四、〇〇	大正十二年	二六、二〇	一三、〇〇
大正十年	四〇、〇〇	三一、〇〇	大正十三年(上)	二〇、〇〇	一三、三〇

商船

大阪商船會社のことである。開業は明治十七年五月、中橋德五郎氏永く之が經營者たり、資本金は一億萬圓、内拂込六千貳百五拾萬圓で、積立金四千萬圓我國に於ては日本郵船に次ぐ大汽船會社である、配當は大正十二年上以來七朱を續けて居るが、株式値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	五〇、四〇	三八、九〇	大正十三年(上)	四三、八〇	三三、五〇

日糖

大日本製糖會社である。設立は明治二十八年で、一時日糖事件なる問題を惹起した名高い會社である。資本金貳千五拾萬圓内拂込壹千八百參拾七萬五千圓積立金壹千貳百四拾五萬六千圓に達し、我製糖界の覇王である。一時逆境に陷つたのを藤山雷太氏が入つて遂に挽回したのであつた。從つてこの株式は市場に於ては常に花形株として許されて居る。配當は大正十二年以來二割で、その株値左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	五九、六五	四五、〇〇	大正十一年	一〇一、八〇	七一、九〇

	最高	最低		最高	最低
大正九年	一九〇、一〇	六六、五〇	大正十二年	一二五、二〇	九〇、〇〇
大正十年	一一五、三〇	七五、八〇	大正十三年(上)	一二九、〇〇	九七、六〇

日本麻

日本製麻會社である。設立は大正四年、東京に本社を有し、資本金壹千五百萬圓、内拂込九百萬圓、積立金參百拾八萬貳千圓を有し安田系の帝國製麻會社と對立して、我國の二大製麻會社の一である、配當は大正十二年上一割三分、下八分、株式の値段は左の通り。(五拾圓)

	最高	最低		最高	最低
大正九年	二二九、九〇	六八、〇〇	大正十二年	六三、九〇	四〇、九〇
大正十年	九四、〇〇	五七、八〇	大正十三年(上)	六一、九〇	四八、六〇
大正十一年	六三、九〇	四〇、九〇			

臺灣糖

臺灣製糖會社である。東京に本社がある。資本金は六千參百萬圓、内拂込參千八百拾參萬圓、積立金八百七拾九萬五千圓で、東洋製糖・鹽水港製糖・明治製糖等と竝び稱せられる。配當は大正十二年上下一割、十三年上一割二分であつた。

株式の値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	七二、四〇	五七、三五	大正十一年	七〇、〇〇	四二、二〇
大正九年	一九七、一〇	七〇、〇〇	大正十二年	七一、九〇	五一、三〇
大正十年	九〇、九〇	六七、六〇	大正十三年(上)	六四、三〇	五四、七〇

鹽水糖 鹽水港製糖會社である。大日本製糖に次いで製糖會社として成績のよい方である。資本金は貳千五百萬圓、内拂込壹千八百拾貳萬五千圓、積立金六百五拾壹萬圓で、配當は大正十二年來一割二分を繼續して居る。株式値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	五三、四五	三五、九五	大正十一年	七七、〇〇	四四、八〇
大正九年	二五〇、〇〇	七〇、三〇	大正十二年	九三、四〇	六一、〇〇
大正十年	九八、四〇	七一、一〇	大正十三年(上)	八一、七〇	六五、三〇

東洋糖 東洋製糖會社である。資本金は參千六百廿五萬貳千圓、内拂込壹千八百四拾

七萬五千圓、積立金百九拾六萬壹千圓、配當は大正十二年以來一割を繼續して居る。株値左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	五七、三五	三六、二〇	大正十一年	六五、九〇	二九、一〇
大正九年	二三八、〇〇	六一、二〇	大正十二年	七五、四〇	四七、九〇
大正十年	九四、三〇	六一、〇〇	大正十三年(上)	六〇、九〇	五〇、九〇

新高糖 新高製糖會社である。資本金貳千八百萬圓、内拂込壹千七拾五萬圓、積立金壹百拾貳萬八千圓を有し、大正十二年以來の配當は大正十二年八朱、十三年上一割二分であつた。株式値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	五三、五〇	二〇、七〇	大正十一年	五七、八〇	三四、四八
大正九年	三九四、〇〇	五一、八〇	大正十二年	六八、三〇	四八、一〇
大正十年	六六、七〇	三三、五〇	大正十三年(上)	七一、六〇	六二、九〇

帝國糖　帝國製糖會社である。資本金參千萬圓、內拂込壹千八百七拾五萬圓、其積立金壹百卅貳萬五千圓を有し、配當は大正十二年八朱、十三年上一割で、株式の値段は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	四九、二〇	一九、五〇	大正十三年(上)	五三、〇〇	四一、八〇

明治糖　明治製糖會社である。資本金參千貳百五拾萬圓、內拂込壹千九百萬圓、積立金は六百九拾五萬九千圓を有し、製糖會社中に於ては、大日本製糖に次いで成績優秀である。配當は大正十二年以來一割八分を繼續し、株値も左の通りである。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	六六、九五	五五、一〇	大正十一年	七八、三〇	五五、〇〇
大正九年	二二五、〇〇	七一、五〇	大正十二年	九五、〇〇	七二、九〇
大正十年	九三、九〇	七一、五〇	大正十三年(上)	九三、五〇	七八、四〇

東電　東京電燈會社である。我國に於ける電燈會社の巨擘で、資本金實に貳億五千八

百萬圓、內拂込壹億九千參百七拾七萬圓で、單に之を資本金のみより見れば、三井合名會社と匹敵し、我國最大の株式會社である。積立金壹千貳百參拾八萬圓を有し、その電力供給區域は、關八州に及び、關西の大同電力、東邦電力の二勢力を優に向ふに廻し得るのである。配當は大正十二年中、上一割四分、下一割で、株値の高低は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正三年	六三、〇五	四八、六〇	大正十一年	八一、四〇	六六、六〇
大正九年	八三、五〇	六〇、六〇	大正十二年	七六、五〇	五三、〇〇
大正十年	八四、八〇	七〇、一〇	大正十三年(上)	五七、二〇	五一、一〇

大同電　大同電力會社である。大正八年十一月の創立で、まだ新會社であるが、福澤桃介氏を社長とし、資本金壹億萬圓、內拂込金五千九百八拾八萬六千圓で我電力界に一大雄飛を試みやうとして居る。配當は大正十二年上七朱五、下八朱で、その株の高低は左の通り(五拾圓)

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	三二、五〇	二六、〇〇	大正十三年(上)	四一、四〇	三九、四〇

瓦斯

東京瓦斯會社である。明治十八年の創業、我國に於ける瓦斯事業の開山である現在の資本金四千五百萬圓、内拂込參千九百四拾萬圓積立金參百九拾七萬七千圓を有し、配當は大正十二年上以來九朱を續けて居る。最近の株値高低は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	六七、〇〇	五五、〇〇	大正十一年	六三、八〇	五〇、〇〇
大正九年	六五、二〇	四〇、〇〇	大正十二年	六二、三〇	四三、八〇
大正十年	六二、二〇	五一、四〇	大正十三年(上)	四九、九〇	四四、〇〇

淺野セ

淺野セメント會社である。近來建築工業の隆盛につき、セメント界は、他の事業の銷沈せるに比して、大活躍の狀態にあるが爲め、大正十一年來、市場の花形株としてもて囃されたのであつた。資本金參千參百萬圓、内拂込壹千九百五拾萬圓、積立金約參百萬圓を有し、配當は大正十二年上三割五分、下二割五分で、珍らしい

好成績を示した。株式の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一四四、九〇	九三、一〇	大正十一年	九九、六〇	六一、二〇
大正九年	一四三、九〇	五四、五〇	大正十二年	一三八、〇〇	一〇三、九〇
大正十年	八一、六〇	五八、二〇	大正十三年(上)	一二一、〇〇	八二、一〇

尙新株(拾貳圓半拂込)は、十三年度、最高七拾圓拾錢最低參拾壹圓九拾錢、十三年上半四拾五圓六拾錢最低廿四圓五拾錢である。

東株

東京株式取引所の株である。資本金四千七百萬圓、内拂込貳千六百七拾五萬圓、積立金四百萬圓を有し、云ふまでもなく我株式市場の主力株として活躍して居る。配當は大正十二年上一割六分、同下八朱、十三年上一割で、株式の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	三三一、〇〇	一四八、〇〇	大正十一年	一六六、〇〇	一〇五、一〇
大正九年	五四九、〇〇	一〇〇、五〇	大正十二年	一四八、九〇	一〇六、一〇

大正十年	一七三、八〇	一一八、六〇	大正十三年(上)	一三七、八〇	一〇七、七〇
大正十二年	一一四、九〇	八三、五〇	大正十三年(上)	一一八、五〇	八七、二〇

尙新株の近況は左の通り。

東新(又ハ新東) 東京株式取引所の新株のことである。市場の最花形で、拂込は拾貳圓五拾錢なるに拘はらず最近(大正十二三年)九拾圓内外の値を保ち、最も動きの多く、且興味のある株である。最近の高低左の通り。

大正十二年	一一四、九〇	八三、五〇	大正十三年(上)	一一八、五〇	八七、二〇

米商 東京米穀商品取引所である。資本金は六百五拾萬圓、拂込四百七拾五萬圓で、積立金五拾一萬參千圓を有し、米取引所としては、大阪堂島米穀取引所と並んで東西の巨擘であり、綿絲取引所としても、大阪三品取引所に相ならんで居る、配當は大正十二年上一割六分、下一割、十三年上一割三分である。株式高低左の通り。

大正六年	二二二、九〇	一五二、九〇	大正十一年	一四〇、九〇	一一三、〇〇
大正九年	三二四、〇〇	一〇二、〇〇	大正十二年	一三三、〇〇	九五、七〇
大正十年	一五七、五〇	一一三、〇〇	大正十三年(上)	一二〇、〇〇	九五、〇〇

尙同新株は貳拾五圓拂込で、高低左の通り。

大正十二年	九七、二〇	六五、九〇	大正十三年(上)	九〇、〇〇	六六、二〇

横濱取(横取) 横濱取引所である。資本金は六百五拾萬圓、全額拂込で、積立金拾五萬九千圓を有し、我國唯一の生絲取引所である。配當は大正十二年上一割一分、同下無配當——これは大震災の爲め——であつたが、株値は左の通り。

大正六年	一一六、八〇	五五、一〇	大正十一年	九五、五〇	五一、一〇
大正九年	二四四、九〇	三九、四〇	大正十二年	六九、九〇	四三、六〇
大正十年	八六、三〇	三九、一〇	大正十三年(上)	五三、四〇	三二、九〇

王子紙

王子製紙會社である。設立は明治六年二月、我國に於ける大規模製紙事業の開祖である。資本金五千壹百萬圓、内拂込參千壹百萬圓で、積立金壹千壹百三拾五萬八千圓を有し、配當は大正十二年上一割七分、下一割五分を繼續して居る。株値左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一八一、五〇	一二六、五〇	大正十一年	八八、九〇	六二、〇〇
大正九年	一八三、〇〇	七九、五〇	大正十二年	九一、三〇	七〇、九〇
大正十年	一〇七、〇〇	八一、五〇	大正十三年(上)	八四、〇〇	七五、八〇

富士紙

富士製紙會社(靜岡)である。設立は明治廿年、王子製紙と並ぶ我製紙界の覇王で、資本金は參千七百五拾五萬圓、内拂込參千參百四拾六萬圓、積立金七百九拾五萬壹千圓を有し配當は大正十二年上一割二分、同下一割五分である、株式高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一三四、五〇	八七、九〇	大正十一年	七七、二〇	四六、五〇
大正九年	一五五、〇〇	七二、〇〇	大正十二年	七四、五〇	五三、五〇
大正十年	九九、八〇	六七、〇〇	大正十三年(上)	六六、〇〇	五六、五〇

日清粉

日清製粉會社である。我が製粉業の巨擘で、資本金は四百六拾八萬圓、内拂込參百拾四萬五千圓に過ぎぬが、積立金貳百五拾四萬圓を有し、配當大正十二年來二割二分を繼續し、株値また左の如く好成績を示して居る。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	九八、〇〇	七三、八〇	大正十一年	一〇三、五〇	六五、一〇
大正九年	一八二、〇〇	六〇、〇〇	大正十二年	一一六、八〇	八三、九〇
大正十年	一〇九、五〇	七六、一〇	大正十三年(上)	一一五、三〇	九一、五〇

日本粉

日本製粉會社である。日清製粉とならんで製粉界の王者を以て任ずる。資本金は壹千壹百五拾五萬圓、内拂込六百四拾五萬臺千圓、積立金參百五萬圓を

有して居る。配當は大正十二年上無配當、下一割で、株式値段左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一〇八、〇〇	六七、九〇	大正十一年	五八、〇〇	二五、〇〇
大正九年	一四〇、〇〇	三六、三〇	大正十二年	五二、五〇	四〇、五〇
大正十年	五九、五〇	三四、九〇	大正十三年(上)	四四、正〇	三九、五〇

日活 日本活動寫眞會社である。我國に於ては第一の活動寫眞會社で、資本金六百萬圓、内拂込參百貳拾八萬四千圓、積立金六拾七萬壹千圓を有し、配當は大正十二年上一割五分、下無配當——大震災等の爲め——であるが、株値は左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	三七、七〇	二四、一〇	大正十一年	七八、九〇	四〇、七〇
大正九年	一六五、六〇	五七、〇〇	大正十二年	七四、九〇	三四、一〇
大正十年	九四、三〇	五八、一〇	大正十三年(上)	五五、四〇	四四、九〇

日石 日本石油會社である、曩に寶田石油を合併して、我國に於ける最大の石油會社

である。資本金八千萬圓、内拂込五千萬圓、積立金貳千壹百七拾壹萬九千圓を有し、配當は、大正十二年上一割二分、下一割五分を算した。株式の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一六八、一〇	一一二、五〇	大正十一年	一二五、四〇	六三、七〇
大正九年	一六二、九〇	八四、六〇	大正十二年	八六、六〇	六二、一〇
大正十年	一四七、五〇	一〇七、五〇	大正十三年(上)	七六、八〇	六六、〇〇

麥酒 大日本麥酒會社の事である。我國に於ける最大の釀造會社で、札幌、朝日の兩社を合併して以來、頗る巨大となつた。資本金は四千萬圓、内拂込貳千四百四拾萬圓、積立金壹千壹百四拾九萬四千圓を有し、配當は大正十二年中、上三割、下二割五分であつた。株値高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正六年	一五二、〇〇	一二三、〇〇	大正十一年	一三三、七〇	九六、五〇
大正九年	二五八、〇〇	七九、六〇	大正十二年	一四一、五〇	一一七、二〇

大正十年　一二二、五〇　九〇、三〇　大正十三年(上)　一四九、〇〇　一三一、一〇

日紡　大日本紡績會社のことである。明治二十二年六月の設立で、關西に於ける一流紡績會社である。資本金は五千萬圓、全額拂込で、積立金參千貳百四拾八萬貳千圓を有し、配當は大正十二年來二割を繼續して居る、最近株の高低左の通り。(大阪市場)

大正十二年　最高　三四、〇〇(六月)　最低　五七、〇〇(一月)　大正十三年(上)　最高　一〇九、三〇(一月)　最低　九〇、九(六月)

合同　大阪の合同紡績會社である、資本金は壹千八百七拾五萬圓、內壹千四百五萬貳千圓の拂込で、積立金壹千六百五萬五千圓を有し、一流紡績として許される。配當は大正十二年來引續き二割、株最近の高低左の通り。

大正十二年　最高　九八、五〇(三月)　最低　四四、〇〇(一月)　大正十三年(上)　最高　一〇二、〇〇(一月)　最低　八六、九〇(五月)

日綿　日本棉花會社である。我國に於ける最大の棉花會社で、米國・印度等に支店を有し活躍して居る。資本金は五千萬圓、內貳千萬圓の拂込で、積立金は貳千八拾八萬九千圓を有し、配當は大正十二年上三割二分下は一割六分を繼續し成績はよい。株の高低左の通り。(新株拾貳圓五拾錢拂込)

大正十二年　最高　三四、四〇(三月)　最低　一九、三〇(一月)　大正十三年(上)　最高　三五、九〇(一月)　最低　一七、七〇(六月)

毛斯綸　大阪の毛斯綸紡織會社である、關西に於ける毛斯綸業の巨擘で、資本金壹千五百萬圓、內拂込壹千壹百貳拾五萬圓、積立金貳百九拾萬壹千圓を有し、配當は大正十二年中、上二割、下一割六分であつた、株式の値段高低左の通り。

大正十二年　最高　九〇、一〇(二月)　最低　六一、〇〇(九月)　大正十三年(上)　最高　七七、五〇(一月)　最低　五〇、九〇(六月)

宇電　宇治川電氣會社である。大阪に於ける屈指の電力供給會社で、資本金參千八百七拾萬圓、內拂込參千八百拾萬四千圓で、積立金參百九拾萬九千圓を有し、大

正十二年中、上一割二分、下一割を配當した。最近の株高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	六四、九〇(六月)	五六、九〇(十月)	大正十三年(上)	六三、〇〇(一月)	五二、七〇(三月)

大株　大阪株式取引所のことである。資本金四千五百萬圓、内拂込金貳千五百六拾貳萬五千圓で、積立金貳百拾六萬圓を有する、大阪市場に於ては鐘紡と共に、二大主力株で、その他の株がこの相場の動きによつて左右せられるのである。配當は大正十二年上八分、下以降六分五厘で、株の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	二八、九〇(三月)	六、〇〇(九月)	大正十三年(上)	二六、三〇(一月)	九二、三〇(六月)

大新　大新は、大阪株式取引所の新株のことである。大阪市場に於ける花形中の花形で拂込は貳拾五圓、その最近の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	一〇〇、五〇(三月)	五七、一〇(九月)	大正十三年(上)	一〇三、六〇(一月)	七七、三〇(六月)

堂島米　堂島米穀取引所である。資本金は六百萬圓、内拂込四百七拾五萬圓、積立金壹百拾萬六千圓を有し、配當は前前前期一割五分二厘、前前期二割四分、前期一割九分(大正十三年六月)株の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	一〇六、四〇(二月)	八五、〇〇(九月)	大正十三年(上)	一〇九、七〇(一月)	九五、九〇(六月)

尚新株二十五圓拂込の高低左の通り。

	最高	最低		最高	最低
大正十二年	八〇、九〇	五三、〇〇	大正十三年(上)	七二、四〇	五六、二〇

三品取　大阪三品取引所のことである。資本金五百萬圓、貳百七拾五萬圓の拂込で、四拾六萬七千圓の積立金を有し、我國に於ける最大の綿絲取引所である。配當は前前期一割、前期一割三分で(大正十三年六月)大阪市場の花形株たる新株の高低左の通り。(拾貳圓五拾錢拂込)

	最高	最低
大正十二年	六六、八〇	三三、一〇
大正十三年(上)	五三、九〇	三五、一〇

久原　久原鑛業會社である。大阪の富豪、久原房之助氏の事業を繼承した會社で、我國に於ける鑛業會社としては、三菱鑛業に次ぎ、北海道炭鑛汽船會社と並んで、事業の大なるを以て稱せられる。資本金七千五百萬圓、四千壹百貳拾五萬圓の拂込で、參千參百卅九萬八千圓の積立金を有し、配當は前前期五分、前記は無配當であつた、株の最近高低左の通り。

	最高	最低
大正十二年	五〇、五〇(二月)	三八、〇〇(八月)
大正十三年(上)	四一、〇〇(一月)	二九、六〇(六月)

鐵工　大阪鐵工所である、造船所としては三菱造船、川崎造船に次ぐ大造船所で、資本金は壹千貳百萬圓、内拂込金壹千五拾萬圓、積立金壹千貳百六拾五萬八千圓を有し、配當は大正十二年以來八朱を繼續して居る、株最近の高低左の通り。

	最高	最低
大正十二年	五〇、七〇(三年)	三八、〇〇(八月)
大正十三年(上)	四三、九〇(一月)	三三、六〇(五月)

阪急　阪神急行電氣軌道會社である。大阪と寶塚、大阪と神戸を聯絡する電鐵で近年大阪市場に於て、大阪電氣軌道(大軌)と共に、動きの多い株である、資本金貳千四百萬圓、内拂込壹千八百萬圓、積立金は壹百四拾貳萬六千圓を有し、配當前前期一割、前期一割二分をなし、その事業の基礎も、漸次阪神電氣や、南海電氣と接近して來た。最近の株高低左の如し。

	最高	最低
大正十二年	七二、〇〇(十一月)	六五、〇〇(十月)
大正十三年(上)	七八、〇〇(四月)	七〇、〇〇(一月)

南滿　南滿洲鐵道會社である。我國に於ける最大の鐵道會社で、同時に政府の監督の下にある特殊會社中の最大のものである。資本金參億八千萬圓、内拂込參億九百拾五萬六千圓、その積立金七千參百八拾壹萬圓を有し、配當は一割を繼續して居る。

最近株の高低左の通り。

	最高	最低
大正十二年	二四、七〇(五月)	一〇二、六〇(十二月)
大正十三年(上)	一〇八、五〇(四月)	一〇四、〇〇(一月)

最近は株の動きは全くない。

紡織布會社(重要)

	資本金	拂込金	積立金	配當	十二年中株値 高値	十二年中株値 安値
合同紡績	一八、七五〇	一四、〇六二	一六、〇五五	二割、〇	九八、五(3)月	八四、〇(1)月
福島紡績	八、〇〇〇	五、六〇〇	一一、八一五	三、一	一〇一、〇(3)	七六、〇(12)
倉敷紡績	一五、〇〇〇	九、三七五	五、四〇八	二、一	九八、五(3)	八五、五(1)
岸和田紡績	九、八〇〇	六、一四四	一三、一二	三、五	一一〇、五(3)	八六、五(12)
和歌山紡績	五、二〇〇	三、二五二	二、九〇一	三、〇	五九、〇(3)	四四、〇(10)
内外棉	一六、〇〇〇	七、七五〇	一三、九六七	四、〇	二四〇、〇(1)	二七、〇(11)
東京毛織	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	四、七六七	〇、六	五〇、〇(3)	二八、〇(12)

	資本金	拂込金	積立金	配當	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
日本毛織	二〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一二、七一九	三、五	一八四、五(6)	一四六、五(1)
帝國製麻	三〇、〇〇〇	一七、一〇〇	一、九二一	〇、七	五三、八(3)	三八、五(12)
片倉製絲	五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	二三、五〇〇	〇、六	三〇、八(6)	二七、〇(10)
一流銀行						
日本銀行	資本金 六〇・〇〇〇	拂込金 三七、五〇〇	積立金 五五、三七五	配當 一、二	一株拂込額 一〇〇、〇	最高 八八五、〇(1)
同(新)	——	——	——	〃		最低 六一〇、〇(1)
正金銀行	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	七一、〇三八	〃	一〇〇、〇	一九八、五(1)
朝鮮銀行	八〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	一六、七九〇	〇、六	一〇〇、〇	九七、五(2)
臺灣銀行	六〇、〇〇〇	五二、四三〇	一二、五八〇	〇、七	一〇〇、〇	一〇三、八(1)
三井銀行	一〇〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	四三、六〇〇	一、二	〃	九八、五(4)
十五銀行	一〇〇、〇〇〇	四九、七五〇	二九、九〇〇	一、〇	一〇〇、〇	一二三、三(1)
近江銀行	三〇、〇〇〇	一八、七五〇	五、六一〇	一、〇	〃	五三、〇(5)

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
住友銀行	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	二九三〇〇	一〇	100〇	四二五(1)	二三五(10)
第一銀行	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	四二五〇〇	一三	〃	三二五(5)	九四〇(12)
第四銀行	五〇〇〇〇	三七五〇〇	一八一七〇	一二	〃	六八〇(5)	六〇〇(10)
一流保險會社（いちりうほけんくわいしや）							
明治生命	二〇〇〇	—	—	二三	100〇	七〇〇〇(12)	六五〇(4)
日本生命	三〇〇〇	—	—	七五	二五〇	一七〇五(3)	四三五(1)
帝國生命	一〇〇〇	—	—	二〇	三七五	二四五(3)	一〇三五(1)
愛國生命	三〇〇	—	—	一五	二二五	一五三〇(1)	一三〇〇(10)
横濱生命	一〇〇〇	—	—	二〇	〃	四八〇(2)	四〇〇(12)
東洋生命	二〇〇〇	—	—	一一	〃	四一〇(2)	三二〇(12)
日清生命	二〇〇〇	—	—	一五	〃	七五二(2)	六五〇(12)
明治火災	—	—	—	三〇	100〇	二〇〇〇〇(1)	一五〇〇〇(12)

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
日本火災	—	—	—	一八	二〇〇	六五〇(5)	四七〇(12)
横濱火災	—	—	—	二〇	二二五	三九二(2)	一六五(12)
東京火災	—	—	—	二〇	二二五	四〇〇(1)	一五〇(11)
東京海上	—	—	—	一五	五〇〇	一五三〇(2)	100〇(10)
帝國海上	—	—	—	一五	五〇〇	九三二(4)	五〇〇(10)
大阪海上	—	—	—	一三	二七〇	四三五(2)	三〇〇(10)
東洋海上	—	—	—	二〇六	二二五	四〇〇(1)	二〇〇(10)
神戸海上	—	—	—	二〇	二二五	三二五(1)	二〇〇(10)
南滿製糖會社（なんまいせいとくわいし）	—	—	—	〇八	三七五	二七二(4)	一七七(10)
大正製糖	—	—	—	一〇	三〇〇	三五三(12)	一九〇(1)

一流鐵道電鐵會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
東武鐵道	二四、五〇〇	一三、七八六	二、三一三	一、三九	五〇、〇	八二、八(3)	七二、〇(11)
南海鐵道	五〇、〇〇〇	二五、七四三	三、八〇〇	一、三〇	五〇、〇	八三、二(3)	七〇、三(10)
阪神電軌	二五、〇〇〇	二一、三七五	二、三二〇	一、三〇	五〇、〇	九四、〇(2)	八〇、〇(10)
大阪電軌	二〇、〇〇〇	一〇、一一〇	一、一九九	一、二〇	五〇、〇	七四、八(2)	六八、五(12)
京阪電鐵	四七、五二〇	二八、六八〇	二、二三一	一、一〇	五〇、〇	六四、五(2)	五八、二(10)
京濱電鐵	一五、〇〇〇	七、五七五	一、〇七五	一、二〇	五〇、〇	六七、三(1)	五五、〇(10)
九州電軌	五〇、〇〇〇	二四、五〇〇	一、二五五	一、二〇	五〇、〇	六六、五(6)	六〇、三(12)
伊那電軌	一〇、〇〇〇	六、一二〇	八四五	一、〇〇	五〇、〇	五三、〇(6)	四八、八(1)

一流電燈電力會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
京都電燈	三〇、〇〇〇	一九、四三三	二、六七四	一、四	五〇	七九、〇(4)	七三、三(11)

東邦電力	一三九、八二一	九九、九八八	八〇六	一、二	五〇	六五、五(2)	五七、〇(10)
帝國電燈	三三、二五二	三三、一二七	四〇五	一、〇	五〇	四四、六(4)	三六、五(12)
鬼怒川水電	四五、〇〇〇	二一、四〇〇	一、一二一	〇、九	五〇	六一、四(4)	四三、六(12)
富士水電	三四、八六〇	一六、四〇六	五五九	〇、五	三〇	三二、三(2)	一八、五(12)
早川電力	一五、〇〇〇	九、一二〇	六九五	一、〇	五〇	五二、〇(1)	四三、五(12)
九州水電	三八、四〇〇	三八、四〇〇	二、三六九	一、二	五〇	七三、三(2)	六〇、〇(12)
矢作水力	五、七五〇	四、六〇〇	七一	一、二	五〇	六九、三(4)	五四、〇(12)
臺灣電力	三〇、〇〇〇	二八、二〇〇	一、九八八	〇、六	四五	三九、八(2)	二七、二(12)

瓦斯會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
北海瓦斯	三、〇〇〇	二、二二〇	四九	〇、五	三七	二八、七(7)	一八、五(12)
大阪瓦斯	一〇、〇〇〇	九、〇七五	五二〇	一、〇	五〇	五四、二(4)	四九、〇(10)

船渠會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
川崎造船	九〇、〇〇〇	五六、二五〇	四〇、四〇七	一、〇	五〇	六五、四(4)	五一、〇(1)
横濱船渠	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	三、四〇三	〇、四	五〇	四五、八(4)	一八、五(12)
石川島造船	五、〇〇〇	五、〇〇〇	三、一三五	缺	五〇	三八、五(3)	八、〇(10)
浦賀船渠	一〇、〇〇〇	六、二五〇	三、八四四	無配	五〇	五六、三(3)	二四、〇(10)

セメント會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株直 最高	十二年中株直 最低
磐城	三、〇〇〇	一、三八八	七七五	二、〇	五〇	九二、〇(12)	七一、〇(1)
愛知	三、〇〇〇	一、六五〇	三七八	〇、八	五〇	五七、〇(11)	四二、〇(1)
小野田	七、五〇〇	五、二二五	二、七六二	一、四	五〇	八三、五(12)	七二、〇(1)
日本	—	—	—	〇、七	五〇	四五、八(11)	三一、六(6)

信託會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
東洋拓殖	五〇、〇〇〇	二七、五〇〇	四、九一七	〇、八	五〇	五八、五(1)	四五、〇(10)
東京信託	五、〇〇〇	二、三七五	二三二	〇、八	五〇	四六、三(5)	三二、〇(12)

一流鑛業會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
旭石油	九、六〇〇	六、一五〇	二六一	〇、五	五〇	四九、七(5)	二六、五(12)
三菱鑛業	一〇〇、〇〇〇	六二、五〇〇	一、七八七	〇、八	五〇	五一、五(3)	三八、五(12)
北海炭礦	七〇、〇〇〇	三九、六二五	七、八三三	〇、八	五〇	四五、八(2)	三六、〇(11)
磐城炭礦	—	—	—	〇、八	五〇	四六、〇(1)	四三、〇(7)
入山採炭	六、〇〇〇	四、二五〇	九三五	一、〇	五〇	三八、五(4)	二六、〇(12)
九州炭礦	五、〇〇〇	三、五〇〇	五三七	〇、六	三五	二六、〇(1)	一八、〇(12)

一流製作會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
芝浦製作所	二〇、〇〇〇	八、七五〇	六、二三七	無配	五〇	一〇二、〇(4)	六三、〇(10)
東京製鋼	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	三、九二二	〇、八	五〇	六三、二(3)	四四、〇(12)
東京電氣	一〇、〇〇〇	九、〇〇〇	二、二三七	一、二	五〇	一〇二、五(7)	八〇、〇(11)
日本車輛	四、〇〇〇	四、〇〇〇	七二九	三、〇	五〇	一〇一、〇(10)	八一、〇(1)
日本鋼管	二二、〇〇〇	一三、二二五	一、二八六	無配	五〇	二七、〇(11)	一四、〇(10)
東洋製鐵	四〇、〇〇〇	三四、〇〇〇	——	缺	二五	一八、二(2)	九、九(5)

主な事業會社

	資本金	拂込金	積立金	配當	一株拂込額	十二年中株値 最高	十二年中株値 最低
キリンビール	五、〇〇〇	五、〇〇〇	二、二二一	一、五	五〇	一一〇、三(6)	六九、八(12)
日東製氷	一五、四八五	一三、五四三	一、一九三	一、〇	五〇	九三、〇(4)	六〇、〇(10)
日魯漁業	一七、〇〇〇	一三、〇〇〇	二八六	〇、七五	五〇	四〇、二(2)	一七、五(12)

日本ペイント	五、〇〇〇	三、六〇〇	三二八	一、二〇	五〇	六五、〇(12) 四八、〇(2)
大日本人造肥料	一四、三〇〇	一四、三〇〇	二六五	無配	五〇	四二、〇(8) 二六、五(11)
日本窒素肥料	二三、〇〇〇	二三、〇〇〇	二、七六一	一、五	五〇	八七、〇(6) 七一、五(10)
日本皮革	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一、一九五	一、二	五〇	五六、五(6) 四三、五(1)
電氣化學工業	一六、五〇〇	七、八七五	一、七四二	一、二	五〇	六九、〇(9) 四六、〇(10)
内國通運	五、〇〇〇	四、七五〇	五八七	一、〇	五〇	七三、一(6) 五九、五(1)
東京建物	一〇、〇〇〇	六、二五〇	一、三一〇	一、〇	五〇	六一、〇(3) 二七、〇(10)

尚會社又は株券に關して、諸種の用語又は術語の主な文字の説明をして置かう。

一流紡績

一流紡績、第一流の紡績會社、即ち市場に於て、常に動きの多い、人氣のよい紡績會社を云ふのである。現在に於ては、鐘紡の如き、富士紡の如き、大日本紡の如き日清紡の如きがそれである（紡織布會社參照）

配當

株式會社の利益金を株主に分配することを利益配當と云ふ。これを委しく云へば、會社の定められた期間――普通は半季を以て一期とする――に擧げた利益金中から、積立金や、役員賞與金等、法定又は必要な支出を除いた金額を、株主に分配する事が配當である、その割合は普通七八分から一割で、好況時代には五六割から十割以上の配當をした會社があつた。而してその配當の多寡が、株相場に影響をする事は勿論であるが、同時に市場に於ては配當期(その會社の總會の前後)配當を付しての相場と、配當は前の持主に與へる事にする相場とがある。

無配當

無配當は、會社がその株式に對して配當をせぬことを云ふ。利益のなかつた時又は利益の尠なかつた時に起る事である、而してこの無配當の場合は、その株の相場は當然下落するのである。

缺損

缺損は、會社の事業不振の爲め、利益があるどころか、損失をまねいた時のことを云ふのである、この場合は無配當である許りか、市場の株の値段も人氣を

失墜する事勿論である。

事業不振

事業不振は、事業界の活氣のないのにも通用し、ある會社の事業が、一向に振はないのにも、この言葉を使ふ。何れにしても經濟界が不況となつて金融硬塞、製品不賣行等の爲め、事業が縮少するの他道ない狀態を云ふのである。

業績

業は事業の業である。績は成績の績である。從つて業績と云へば、事業の成績と云ふ義で、つまり會社の事業、成績、製造工場の事業成績と云ふのを、簡單に業績と呼ぶのである。會社ならば、この業績の如何によつて、市場に於けるその株の値に變動を起すと云ふ事になるのである。

拂込以下

拂込と云ふのは、會社の株の拂込んだ金の高である。卽ち全額拂込の株ならば、普通五六圓であるが、拂込以下と云へば、その市場に於ける相場が五拾圓より以下と云ふ意で、拂込以下の相場が立つ樣な事では、會社の成績は決してよくないのである。兎に角にも一割以上の配當をして居る會社ならば、採算上利廻り一割

位にはなるので、時價が拂込以下となる筈はないからである。

減配　會社が事業の不振の爲め、利益金減じ、前期又は前前期の如き利益配當を行ふ事の出來なかつた場合、配當率を減ずることがある。それを市場では簡單に減配と云つて居る。例へば郵船會社が、戰時中六割の配當をなしつつあつたのに、その後之を減じて二割又は三割とした事の如きことをいふ。

緊縮方針　緊縮は、縮めること。切りつめる事を云ふ卽ち緊縮方針は、會社なり、政府なりがその經費又は財政を切りつめる處の方針を云ふので、財界不況、又は財政困難の時に行はれるのである。この場合には、會社ならば事業不振、政府ならば財政整理の際で、市場にとつては決してよい現象ではない。

第三　米穀市場

一　米穀取引所

米市場の濫觴　抑も米取引の濫觴は、遠く德川政府の初にある。傳へられる處によれば寛永・正保の頃、大阪大川町に居住した商人三代目淀屋辰五郎なるもの、西國筋諸侯方の積登米を引受け、之を賣捌くに當り、大阪市中の米商人を集めて、競賣買をやつたのが、そのはじめであると云ふ。蓋しその當時の大阪は、我國に於ける唯一の物資集散地で、諸侯の藏屋敷があり、諸侯は、大阪の商人に米を賣つて、その臺所を賄つて居たのであつたから、淀屋辰五郎は、謂はば諸侯の御用商人であつた譯である。

かくて淀屋の米市場は、その後十數年間持續したので、遂にこれが大阪に於ける。米賣買の唯一の方法となり、淀屋が沒落する頃には、當時開發せられた堂島新地に於て、多數の米商人相集つて、米穀の賣買をはじめて居たのであつた。これ現今の堂島市場のはじめで、米相場と云へば、直ちに堂島が代表するが如くに思はれるのは、爾後二百年間、引續いて堂島を中心に、米市場がたつて居たが爲めである。その後の沿革をざつと述べれば、

一、享保六年八月米價暴騰の爲め、市場閉鎖。
二、同七年八月壹千石までの制限を付して再開許可。
三、同十年秋休止。
四、同十四年冬木善太郎、北濱米會所を創立。
五、同十五年加州侯の援護により、北濱を廢止して、堂島に再開。
六、同十六年米價引上方に就て加島屋久右衛門外四名の意見を徵し、同人等に米年

寄申付、脇差羽織用及び袴着用を許す。
七、明和五年三月二十二日堂島會所燒失。
八、同三月二十七日急修理の上立會開始。
九、天保十三年八月米市場の規則改正。
十、明治二年石建米賣買禁止。
十一、明治四年米會所再開許可。

等である。かくして明治四年に堂島に米會所を置いたのが、今日の米穀取引所の開山で、更に明治九年六月、米會所條例の發布によつてはじめて、米市場が、法律的に許されて事となつたのである。

尙東京に於ては、幕府時代には、纏まつた米會所と云ふものはなかつたが、明治二年に京橋鐵砲洲に東京商社なるもの設立され、次で兜町に移轉して、米の限月取引を開始したのがそのはじまりで、次で明治七年之に對抗して日本橋蠣殼町に中外商行會所な

るもの設立され、盛んに限月賣買をやりはじめて以來、頗る盛大になつたのである。この二會所の後身が、今の東京米穀市場たる事云ふまでもない。

地方米市場

斯くの如く、米市場の永い歴史を有し、且隆盛なる所以のものはその目的物たる米穀が、我國人の常食としては一日と雖も缺くべからざるものであるがために、卽ちその一定せる値段を作る事の必要があるからである。而して以前各地に米市場の設立を見た理由も、當時交通不便の際、中央と地方との經濟關係が、今日の如くでなかつた結果、地方は地方で、一の相場を作ることの必要に迫られたが爲めであるが、最近國内の經濟關係が、交通機關の完成と共に、漸次緊密となり、今や世界の經濟關係が一とならうとするに際しては、一地方のみの米の値段を作る必要はない事となつて居るのである。

現在の米穀取引所

米穀取引所は、我國には二十六ケ所ある。卽ち、

東京（六百五拾萬圓）
京都（參百萬圓）
名古屋（貳百五拾萬圓）
神戸（參百萬圓）
熊本（參拾萬圓）
岡山（貳拾萬圓）
鶴岡（拾貳萬圓）
姫路（拾萬圓）
津（同上）
岡崎（同上）
近江（同上）
岡山（同上）
堂島（六百萬圓）
横濱（參百萬圓）
酒田（參拾萬圓）
佐賀（參拾萬圓）
四日市（貳拾五萬圓）
下關（貳拾萬圓）
長岡（拾萬貳千圓）
新潟（拾萬圓）
桑名（同上）
靜岡（同上）
金澤（同上）
高岡（同上）

伊豫（同上）　小樽（同上）

であるが、然し右のうち京都、神戸、横濱等は株式と兼營であるために、專門なのは三十一ヶ所である。而して米穀市場も、株式市場と同じく、東京、堂島の二大取引所に、その總ての力を握られて、建相場の如きに至つても、全くそれに左右せられるの觀がある。

殷盛な地方米市場

然しその資本金は少ないが、久しい市場の歴史と、且地方的勢力の爲めに、その間にあつて、相當重きをなして居るのは、

名古屋、　桑名、　神戸、　下關、　熊本。

等で、次では京都、四日市、津、高岡、新潟、金澤、佐賀、岡山等である。名古屋は東京大阪に次ぐ經濟市場の關係から、桑名は、歴史的の重要市場で、且濃尾米の集積地である關係から神戸は昔の兵庫市場、下關は九州と本州の聯絡地點、熊本は肥後米の産地

と云ふ關係から、何れも米市場は殷賑を極めるのである。その他の小米穀取引所の中には、昔はいざ知らず、今日に於ては全くその存在を疑はれる狀況にあるのであつて、いはゆる寫眞取引又は電報取引とかによつて辛うじて持續して居る處もある。

電報取引（寫眞取引）

電報取引と云ふのは、地方の小取引所が、東西の大市場の建値を電報又は電話によつて寫し取つて、その建値の變動に依つて一種の賭博をすることである。從つてこの電報取引又は寫眞取引によつて、取引所を經營して居る事は、法律違反であつて、一日も之を許すべきではないが、さて時の政府が、之を斷行しようとすれば、政黨關係や、情實關係による大運動を起すので、遂にその重大な弊害を認めながら、今日まで放置せられて居る有樣である。現にある小取引所の如きは、これは株式であるが、東京取引所が火災の爲めに休業した時、その取引所も同樣休業したと云ふ滑稽をすら演じたことがある。

從つて米市場に就ても、株式の場合と同じく東京及び堂島の市場の狀況を知れば、大體の模樣が分る譯である。

東京米穀商品取引所

東京米穀商品取引所は、明治九年五月の創立である。當初の資本は僅かに拾萬圓、明治八年の米商所條例によつて生れた兜町米商會所（前身東京商社）蠣殼町米商會所（前身中外商行會社）の合併して、東京米商會所と稱したのがその前身である。明治廿六年取引所法の發布により、名稱を東京米穀取引所と改め、更に同四十一年、東京商品取引所を合併して、現名稱に變更し且資本金を增加し、更に大正二年には一躍參百萬圓に增資して、堂島米穀取引所と共に東西の二大米穀取引所たるに至つた。現在は六百五拾萬圓、四百七拾五萬圓の拂込、配當は新舊共に大正十二年上半期一割六分、下半期一割、株式値は大正十二年中、舊株最高壹百參拾參圓（三月）最低九拾五圓九拾錢（十一月）新株（貳拾五圓拂込）最高九拾七圓貳拾錢（三月）最低六拾五圓九拾錢（十一月）であつた。尙大正十三年上半期中の平均値（舊）

百圓內外（新）七拾圓搦みである。

堂島米穀取引所

堂島米穀取引所は、我國に於ける米穀市場の開山である。その源は寬永・正保の頃淀屋辰五郎によつて發起せられた米會所竝びに元祿年間米市場の堂島に開かれたものであるが、明治になつてからは、明治四年に武富辰吉、磯野小右衞門氏等によつて設立せられた米商會所が、その濫觴である。かくて明治六年開商社中の油庭會所を合併し、同十二月、堂島に新築され、九年八月米商所條例によつて株式會社を組織し、ここに鴻池善右衞門氏を頭取として堂島米商所なるものが、正式に設立されるに至つたのである。

堂島米穀取引所となつたのは、明治廿六年（取引所法制定）で、當時の資本金七萬五千圓、（一株百圓）に過ぎなかつたが、間もなく增加して拾五萬圓（一株も五拾圓に改む）となし、更に貳拾五萬圓に增し、大正二年には一躍して百貳拾萬圓としたのであつたが、今日では更に增資して六百萬圓、拂込額四百七拾五萬圓に達するに至つたのである。東

京の六百五拾萬圓に對して、殆んど遜色ないと云つてよい。

配當は、新舊とも大正十二年上半期一割五分二厘、下半期は二割四歩の好成績を示し

その株値も、同年中、舊株(五拾圓)最高壹百六圓四拾錢(二月)最低八拾五圓(九月)新株(貳拾五圓)最高八拾圓九拾錢(二月)五拾參圓(九月)であつて、大正十三年上半期中の中値(舊)百圓搦み(新)六拾五圓搦みである。

二　期　米

新聞・雜誌の商況欄に、「期米」なる欄がある。これは定期米市場を略した文字で、卽ち今日の米穀取引所に於ける清算取引市場の事である。これからこの期米に就てお話をしよう。

幾月限　期米の取引方法は株式市場の清算取引と同樣で、當・中・先の限月制であるが、期米では、株式と區別する爲めにその受渡しの月を指して七月限と云ふ風に云ふのを普通とする。卽ち今が七月ならば、當限を七月限と云ひ、中限を八月限と云ひ、先限を九月限と云ふ樣なものである。然し前場・後場・寄付・大引は株式と同樣に呼んで居る。

節　期米の株式と異なるのは、その取引が銘柄賣買でなく、格付賣買である事である。

從つて株式の如くに、各銘柄について、相場が立つ譯でないから、これを普通十二節に分け、その節一節について、競賣買をやるのである。節とは一くくり、又は一ふしと云ふ事から初つたので、普通は時間によつて之をきつて居るのである。各取引所によつて節の定め方が異ふ。

格付賣買　期米取引は株式の如く、銘柄賣買でない。即ち或る一定の標準米を作つて置いて、それによつて、毎日毎日の相場を立てる譯で、上記の節節によつて、賣買をするのである。それを格付賣買と云ふ。

標準米(目安)　期末は格付賣買であるために、その相場の標準となるべき米を建てて置くことを必要とする。即ち豫め一つの銘柄米を賣買受渡しの目安(標準米)と定め、他の銘柄米は——例へば越後米・肥後米・朝鮮米と云ふが如く——その目安米と比較をして品質の良否に從ひ、高下を附し、受渡しに用ゐるのである。今之を例解すれば、現在東京市場の期米の標準米は、武藏產の中米と云ふことにして居ると同じで

ある。

東京の目安米　東京米穀取引所の標準米は、武藏產の中米である。即ち武州に出來る米をその品質によつて一等から二十等に分ち、その中の十等級の米を以て標準米と定めて居るので、つまり毎日市場に建つて居る相場は、この武州中米の値である事を知らねばならぬ。從つて他府縣の產米は、豫めこの武州中米と品質の比較をなし前年中に格差を決定して取引を行ふことなつて居る。この標準米と同じ値打に取扱はれるのは、岡山米で、若し宮崎縣米の如く、標準米より品質のさがる米、即格下りの米を、受渡しの際の渡米に使用するとすれば、その差額だけは、渡方より現金で受方に支拂ふこととなつて居る。

堂島の目安米　大阪市場の目安米は、攝津中米を以てして居る。

代用受渡米　期米相場の受渡をなす時の、標準米は、右の通りいづこの取引所に於ても、之を一定して居るが、米價騰貴の場合などには、代用受渡米なるも

のを定める。それは米價調節の目的から、受渡し米の範圍と數量とを多くして、賣買需給を圓滑ならしめる爲めであつて、朝鮮米、外國米を內地米に併用して受渡しに用ゐる事がある。此の場合は、つまり買方は、一般家庭向として歡迎されない劣等米を背負込む虞れがあるから、買煽りを躊躇する結果、定期の呼び値を低下せしめる事となるのである。

三　正米

正米と云ふのは、定期米に對する現米と云ふ意で、それは全然米穀取引所には關係なしに取引せられるものであるが、然しその値段は取引所に於ける相場を標準にして賣買せられるのみならず、その正米が、定期米取引の基礎となるために、特に緊密な關係を有する。

重な正米市場

重な正米市場は、東京に於ては、深川と神田川とで、大阪・神戸・(兵庫)下關が、我國の五大正米市場と云はれる、蓋し正米市場は、船又は汽車の便利のよい處でなくてはならぬので同時に倉庫を必要とする處から、東京に於ても船積みの便利のよい深川——これは幕府時代から——汽車便のよい神田川——これは東北方面の米の集散地、——が必然的に選ばれたものである。兵庫・下關の市場も

亦、さう云ふ關係にある事云ふまでもない。

正米相場　さて正米市場に於ける値段は、どう云ふ風にして立つかと云ふと、定期米相場を標準にして、一方には市場に於ける廻着米の狀況によつて定まるので、勿論それは定期米と同じく玄米一石を以て單位とせられるが、これは一日に一度で且各銘柄によつて値を立てるのである。これを例示すれば即ち左の通り。（大正十三年七月四日神田川市場の建値）

△神田川市場　値合一二十錢高

千葉四等	三八六五円	茨城一等	四〇五〇円
越後二等	三七四〇	同三等米	三六八〇
同　米	三五九〇	同四等米	三四〇〇
同不合格	三三二〇	秋田三等	三八二〇
同　米	三八一〇	同四等米	三七四〇
同五等米	三六二五	肥後二等	三八四〇

同三等米	三七六〇	同四等米	三七〇〇
日向三等	三八七〇	同四等米	三七八〇
同五等米	三六七〇	本庄一等	四〇四〇
同三等米	三九一〇	同四等米	三八〇〇
本石一等	三九四〇	同二等米	三八七〇
同三等米	三八〇〇	村山二等	三七三〇
同三等米	三六五〇	同　米	三六二〇
山居二等	三九四〇	同　米	三九三〇
同三等米	三九〇〇	同　米	三八九〇
鶴岡三等	三八四〇	同　米	三八三〇
同檢三等	三八四〇	同　米	三八三〇

正米標準相場　正米市場では、毎日賣買された米で、一口二十五俵以上のものは、銘に等級と取引價格を併記して發表して居るが、別に上中下米、何れ

も中邊の米を平均し　標準相場と云ふものを定める。それが日日の新聞に發表せられる正米標準相場なるもので、これが一般家庭に供給せられる米の値段の標準となるものである。

正米の賣買

さて然らば米は如何なる方法によつて、生産者の手から、正米市場に集まり、更にそれから消費者の手に渡るかと云ふと、今日までの習慣では普通に生産者より仲買人、卽ち商人の手先、又は買集め人の手を經て、地方米商人に移り、更に消費地の問屋に集まり、之が正米市場に現はれるので、一方小賣白米商は、その問屋から仕入れ、之を白米として、消費者の手に之を渡すのである。而して斯く米は消費者の手に移るまでには、數回米商人の間を轉轉するから、その手數料や、運賃倉入費等に多額の費用を要し、生産者の利益は常に蹂躙せられる傾きがある。從つて、近來之を改善しようとする議が、しきりに考究せられて居る。

米問屋

問屋とは、自分の名を以て、他人の爲めに、米の販賣又は買付を爲すことを

業とする者の事で、謂はば受托賣買業者のことである。而してその得る處の手數料、卽ち口錢は、荷主との契約によつて、一定の歩合を受ける場合があり、又は荷主からその物品を廉く買取つて、これを他に高値に賣つて、その間の利得をなす場合とがある。

買付問屋

問屋の中に於て買付問屋と云ふのは、正米の買付をする問屋で、而してそれは農家又は地方の米問屋から商談のあるのを待たずに、問屋自身に産地から買付け、全然自己の計算によつて賣却するものを云ふのである。東京・大阪其他正米市場に於ける問屋の大部分は、悉くそれである。

委託問屋

正米の取引をやつて居る問屋は、今日まで殆んと買付問屋、卽ち自身に産地から買付け、それを自身の計算に於て賣買する問屋であつたが、近來時運の進展に伴れて、地方大地主や、産業組合・農會・東洋拓殖會社などから直接に問屋に、その所有米又は保管米を委託するのが多くなつた結果、その委託により、同時に計算も委託主の計算により、米を賣却する問屋が出來た。それか卽ち委託問屋なるもので

ある。而してこの委託問屋の出現は、云ふまでもなく、今日まで買付問屋の買付方法が、誠に複雑を極め、その間再轉三轉して徒らに手數料のみが嵩む爲め、それが米價に影響する處尠くないので、その手數を省略する爲めと、一面生産者の利益と云ふ事から出發して居るのである。

次に米によつて、種種の名稱があるが、今その解説を試みよう。

廻着米　廻着米とは、陸上運送によつて、正米市場に着する米のことで、昔は陸上交通が不完全不備であつたがために殆んど問題にもせられなかつたが、近年、陸上交通の發達につき、到着期の迅速確實、積荷の安全と云ふ事から、海上輸送の船積米を凌駕するに至り、東京・大阪・神戸等大都市の鐵道各驛は、この廻着米で、全盛を極めて居る。

船積米　産地から東京・大阪に轉送される米は、船積米と廻着米とに區別される。船積米とは、讀んで字の如く、船に積んで來る米のことで、昔、陸上交通の發達しなかつた時代は、殆んどこの船積米のみであつたから、東京・大阪共に、船付のよい處が、正米市場となつて居たが、最近は、到着期の迅速確實、積荷の安全等のことから、且刻刻に發達して行く陸上輸送が增加し、船積米は誠に尠なくなつた。

直輸米　大都市に集まる米は、主として船による船積米、陸上運送による廻着米で同時に買付米か、委託米かであるが、更にその外に直輸米なるものがある。それは船による、又は陸上運送によると云ふ樣な區別なしに、大都市の白米商が、直接に産地から買入れ、それを精白して、消費者に賣る處の米である。これは白米商としては殊に利益が多いので近年頗る增加する傾向がある。但し白米商の小賣値段は、勿論正米市場に於ける標準相場を基にするのである。

買付米　買付米とは、買付問屋が、産地に於て買付けた米のことで、市場に到着すると、正米となるが、それまでの道程にある米のことを云ふのである。

軟質米　軟質米とは、夏季に於ける保存力が、不確實な米を云ふので、主として北國米で庄内米の如き、東北米の如きがそれである。つまり寒い處に出來るので暑氣に耐え得ないものである。

硬質米　硬質米と云ふのは、保存上、耐久力のある九州米や、東海道米、中國米等、南國に出來る米を云ふのである。

混砂米　米を搗くのに、砂を混ぜて搗くと、早く搗ける許りでなく、米が綺麗になるので、近來は殆んどこの方法によつて、米を搗いて居る。それを混砂米と云ふ。然しこの混砂米は、衛生上から見て、甚だ宜しくないもので、砂が附着して居る爲めに、往往にして齒を損ひ消化器病の原因となる事がある。從つて、なるべく無砂米を食ふ事にした方がよいが、市場ではそれを二つに區別して賣つて居る。

鮮米　鮮米は朝鮮米である。近來朝鮮に於ける米作は、併合以來、官民の大努力の爲め、漸次良好となり、內地米に匹敵する品質となつて來た。ことに群山地方、

慶尙南北道の產米は、續續內地米の領分に侵入しつつあるのである。

外米　外米は外國で出來る處の米のことである。卽ち日本の米が足りないとか、又は良質であるので高價に賣れると云ふ處から、日本米を外國に出して、その代りが入用と云ふ場合に、輸入せられる處の米である。一名南京米とも云ひ、品質は日本米に較べれば、無論劣等でその產地は主として支那・英領印度・佛領印度等である。然し日本に來るのは、主に暹羅・西貢・蘭貢等である。

四　米相場記事

次には米相場記事の讀方をお話しする。而してそれは各新聞ともに、期米又は正米の欄にこれをおさめて、相場欄の重要な部面をなして居るのである。

相場記事の書き方

各新聞共に、米相場記事の書き方は、ほぼ同じ型で、先づはじめに東京ならば東京米穀取引所に於ける、その日の立會、卽ち前場後場の高低表、竝びに取組高、出來高を述べ、それをまた狂騰とか、躍進とか云ふ形容詞で簡單に大勢を報じ、次にはその日市場に於ける形勢を報ずる。その例として大正十三年七月五日の大阪朝日新聞を切ぬいて見る。

更に躍進

昨後場狂騰の機先今前場は稍行過ぎの嫌ひありとして賣迎へられ三木靱等の利喰もありて五十錢丁度とボンヤリに寄附きたるも林治、福寅、潮先等の買物目立ち小浮動裡にも七十九錢と引縮めアト一と息商狀にて結局六十九錢と前場を終る後場は八十八錢と上放れ安値突込の煎れに四圓臺に乘せ止際二十一錢と昂進の强調を呈し結局止は當限は五圓臺先物は更に二十六錢と進んで高値に大引した。

つまり、前場は前日狂騰のあとを受けて多少引締まつた相場を見たが、後場も依然前進の調子で、高値に大引したと云ふのである。

かくしてその次ぎには、かくなるに至つた原因や、亦四圍の事情、進んでは立會の狀態を書いてゐるのである。

次にはこの雜報記事に混じて『東京朝日』ならば、「米界春秋」又は「米界見聞」『大阪朝日』ならば「米界餘滴」『大阪毎日』ならば「擊拆餘音」など云ふのがあるが、あれは市場の人氣を紹介し、又は一種の側面觀を書いたもので、何れも相當名文を以て、人を惹き

つけて居る。

各地の形況　次には、東京新聞ならば、大阪市場の形況、大阪ならば、東京市場の形況を表出し、變動のあつた時にはその雜觀を簡單に報道するなどに努めそれと竝んで神戸や、名古屋・桑名・下關の如き、重要な米市場の、その日の形況を報じて居る。

正米と白米　正米市場や正米標準相場は之を表を以て現はし、更にその說明材料として、東京ならば神田川廻着米や、在庫米等の表を揭げ、次で市中の白米標準相場なども、洩れなく表示してこの記事を終つて居る。

米相場の單位　米値段の單位は總て玄米一石建の値段である事を承知せねばならぬ。

次に必要なのは、米穀市場だけに使はれる用語二三である。普通市場に於ける用語は株式市場と同樣であるが、左の如きは、米のみに用ゐられて居る樣であるから、特に說

明を試みて置かう。

在米消化　在米と云ふのは、市場にある米のことである。つまり何處の倉庫、何處の揚場に、積んである米の事であるが、その在米が賣りさばかれることを在米消化と云ふのである。この在米消化のよい時に、產地からの米が、市場に順調に廻送して來た時は、いはゆる米の供給不足を現出するから、米の騰貴を來すこととなるのである。

作柄　作柄は、米の出來具合と云ふことで、つまり植付けを終つて以來、その出來模樣を云ふのである。「內地の作柄不良」とか、「作柄良好」とか云ふのである。

寄田褒め　青田褒めと云ふのは、天氣都合や、蟲害の關係等のために、その年の作が良好であらうと豫想される事で、その結果は、相場が、安くなるのを原則とする。卽ち弱氣全盛となるのである。

第四　商品市場

一　綿絲

商品取引所は、我國に於ては今の處、綿絲と生絲と小麥と大豆槽との賣買取引を行ふ事となつて居る。綿絲の取引所は、

商品取引所

大阪三品取引所　東京米穀商品取引所　名古屋米穀取引所（近來分離して會員組織の綿絲取引所が出來た）で、生絲は、

横濱取引所

小麥と大豆槽とは、

東京米穀商品取引所

と云ふ事になつて居る。

大阪三品取引所　大阪三品取引所は、明治二十七年二月の設立で、はじめの資本金拾五萬圓、翌廿八年財界不況の爲め半減したが、廿九年には參拾萬圓に增資し、四十二年には更に壹百萬圓に增資した。そのはじめ大阪綿絲取引所と稱したが卅四年に大阪三品取引所と稱し今日に至つて居る。現在の資本金は五百萬圓（拂込貳百七拾五萬圓）で、我國に於ては屈指の大取引所である。この取引所の建相場は、上海交易所の相場と並んで、東洋に於ける綿絲の標準相場となつて居るのである。

三品　抑も三品と云ふのは、棉花・綿絲・綿布の三つの品と云ふ意で、それは取引關係に於ては離るべからざる關係があるからである。蓋し大阪三品取引所が、この三者を一にして取引をなすといふことは、綿絲商が紡績會社から、綿絲の先買約定を爲し、或は需用者に向つて同樣の先賣約定を爲すや、この間、相場變動の危險に備へん

が爲め、取引所に於て賣繋ぎ、又は買掛けを爲し、又一方紡績會社が、棉花を買入れて綿絲を賣り、更に織物業者が綿絲を買入れて、綿布を賣る等の便利を圖らん爲めである。

東京綿絲市場（杉の森相場）　東京の綿絲市場は、東京米穀商品取引所の事業として取引されて居るが、市場は日本橋堀留杉の森にあるので、期米を蠣殼町相場と云ふに對し、これを杉の森相場とも云つて居る。

輸入棉花　日本は棉花の產地としては、まことに貧弱で、大正十年後に於て僅かに百二十萬俵を產したにすぎない。そこで、綿絲を作り出す原料、卽ち棉花はその大部分を外國から輸入して居るのである。今最近數年間に於ける。輸入棉花の產地別を表示すれば左の如くである。

	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年（上半）
米國	三三九、一六四千円	二七、四三五千円	一七八、八〇八千円	二二、九二千円
印度	三五七、五八一	一八一、七〇七	二〇九、八九七	一九八、二八六

支那	二〇三、四七七	二四、一三〇	二八、五二一	一七、三九六	
埃及	七、六一三	二、七四五	八、四六四	二五三	
佛領印度	一三一	一、四三六	九二三	一六、七三五	
海峽殖民地	一、一二八	一、二六三	五二三	四四三	
蘭領印度	四七五	三〇〇	六一五	一七五	
其他	三、六三〇	一五一	八六	九九	
合計	七三、四三七	四三八、一七二	四三七、八四〇	三四五、二九九	

即ち印度(英領)からの輸入棉が第一位で、次は米國棉、それに次では支那棉、佛領印度棉、馬來棉、埃及棉と云ふ順序である。兎も角この輸入棉花は、我輸入品中の常に第一位に位して居るのである。

印棉　印棉と云ふのは、印度產の棉花の事、即ち我輸入棉中の第一位を占むる處の棉花である。而して普通印棉と稱せられるものは、單に英領印度產のみでなく、佛領・蘭領の悉くを含むので、米國棉、即ち米棉よりは、最近二倍の輸入率となつて

居るのである。然し之を十數年以前に比すれば、印棉と米棉との關係は三に對する一であつたが、近年日本の紡績が太物よりは細物に移つたので、細物に不向な印棉は漸次減少の傾を呈したのである。印棉にはベンゴール・オムラ・ブローチ等の種類がある。

米棉　米棉と云ふのは、米國產の棉花の事、即ち綿絲——ことに細物の原料綿である

現在世界に於ける棉花の產國は、左の通りである(單位千俵)

米國	八、三四〇	印度	三、六二二
支那	一、六五〇	埃及	六八三
ブラジル	五六〇	メキシコ	一六五
ペルー	一四六	日本	一二〇
南阿	七五	露國	五〇
アルゼンチン	二六		
計	一五、五九三		

米國が、殆んどその半分を占めて居るのである。而して米國に於ても、殊にその産地は、南部諸州で、北部地方はいたつて尠ない。尙紐育に棉花取引所があり、その相場によつて値は變動する。

棉花輸入商

これ等印棉・米棉が、如何にして我國に輸入されるかと云ふと、それは殆んど總ていはゆる「棉花輸入商」なるものの手によるのである。棉花輸入商と名のつくものは、その大部分大阪で、約六十餘を算する。その中に於ても、印度又は米國に支店・出張所を有し、直接買付を爲す主なものは、日本棉花會社・東洋棉花會社・江商會社・横濱生絲會社・大阪棉花會社・日清棉花會社等で、何れも印度は孟買に米國は紐育やテキサスに十數名の駐在員をとどめ、常に棉花の買付を爲す爲めの事務の衝に當つて居る。

原棉の買付

原棉と云ふのは、原料棉花と云ふ事である。而してこの原棉は、如何なる方法によつて、棉花輸入商の手に買集められるかと云ふと、抑も棉花

の出廻期は、毎年八月半からで、遲いのになると翌年六月頃までである。この期間、各會社の在外出張員は、各地を廻つて、直接生産者から實棉繰棉を買付ける。そしてそれを豫て特約又は經營の繰綿工場、又はプレス工場に送り、四百封度づつを麻布に包んで壓搾し、鐵の帶をしめて一俵となし、各自の商號を捺した上で積出港へ送るのである。

棉花積出港

原料棉花の積出港は、印度に於ては孟買が第一で、次は南印度のチチコリ、東ではカルカツタ、西ではカラチであるし、米國に於ては南のニューオルレアンス又はガルベルストン、西海岸ではシアトル、タコマである。

原棉積取契約

原棉の輸送は、豫て棉花輸入商と、各汽船會社との間に、特別な「原棉積み取契約」なるものがある。印棉の日本輸送は、紡績聯合會と日本郵船會社との間に成立したる印棉積み取り契約で行はれ、米棉は日本棉花同業會と日本郵船・東洋汽船・大阪商船の三社との間に結ばれて居る米棉積み取契約で行はれるのである。

國際的棉花取引

かくて日本へ着すると、直に陸揚し、稅關内で看貫の上、棉花商から紡績會社に渡すのであるが、時によると棉花輸入商が、内地の紡績會社の註文以上に、前途の需要を見こして、原料を買付ける事がある。斯かる場合は棉花商は値下がりの危險を轉嫁する爲めに、印度ならば孟買のサッタ取引所の定期先物に賣つなぐし、米棉ならば紐育の定期に賣つなぎをなし、同時に巧みに轉賣買戻しを試みて、利益を博するのである。然し近年棉花輸入商のこの試みは、頗る圖に當つて、返つて註文だけの買付に對する口錢よりは、この方の利益が巨大な事があるが爲めに、大に國際的に發展しようとしつつあると云ふ。而してその大志を揮ひつつあるのは、日本棉花(大阪)、東洋棉花(同)、江商(同)、横濱生絲の四社であると云ふ。

さて棉花が斯くの如くして、輸入せられるとすれば、間もなく内地の紡績會社の手によつて、綿絲とされて了ふ。其處で今度は綿絲となつてからのお話をしなければならぬ

それに就ては、先づ綿絲に關する用語を說明して置く必要がある。

番手(綛)　番手とは、綿絲その他絲類の單位で、つまり一綛(カセ)——一綛は八百四十碼(ヤード)——で一封度(ポンド)の重量あるものを一番手と云ひ、番手二十綛を以て重量一封度となるのを二十番手、四十を以て一封度となるのを四十番手と云ふ。從つて番手の多くなる程、絲が細かくなる譯である。尙一綛を日本の長さにすれば二百五十三丈である。

一玉　綿絲幾綛かを合せて、重量十封度となつた時、それを一束としたのを、一玉と云ふ。つまり二十番手の絲ならば、二百綛を一玉にし、四十番手の絲ならば、四百綛を一玉と云ふのである。

一梱　綿絲一梱と云ふのは、重量四百封度のものを云ふのである。つまり一玉を四十合せて、それを束にしたのを云ふのであつて、之が綿絲受渡しの單位となつて居るのである。

一綛　一綛は綿絲の單位で、長さ八百四十碼を以て一綛と云ふのである。

一綛(カセ)ハ八百四十ヤードニシテ一封度

太絲

從來日本では、木綿物が非常に賞用せられて居たので、太絲が盛んに用ゐられたが、その太絲と云ふのは、六番手から二十二三番手までを云ふ事となつて居る。而してこの太絲の原棉は、主として印棉である。

近年我國では、木綿物がすたれて、絹綿交織と云ふ樣なのが流行し出した爲めに、この太絲の需要がだんだん減じて行き、中絲・卽中ものが盛んに用ゐられる樣になつたので、紡績會社でも、この大絲の紡出を控目にして居る。

中絲

中絲と云ふのは、普通二十二三番手から六十番手までの絲である。この原棉は主に米棉で、印棉も用ゐるには用ゐるが、米棉に混ぜて用ゐる事として居る。殊に、近來我國の需要が太絲による木綿物よりは、絹棉交織や、瓦斯織等に轉じて來た結果、この中絲の使用が、旺盛になつて來た爲めに、それが原棉の輸入關係にも及ぼし印棉の輸入が漸時少くなつて、米棉が增加しつつある。中絲は主として金布や、綿セル瓦斯織等に用ゐる。

細絲

細絲は、六十番手以上の絲を云ふ。卽ち極く細の絲である。これは主として絹綿交織に用ゐる絲で、原棉は、埃及產のものを使用するのである。

原棉の用途

原棉の用途は、會社によつて多少は異るが、大體に於て、十六番手以下の絲は印棉、二十番手は米棉二半、印棉七半、三十番手は米棉印棉半半、四十番手は米棉、六十番手以上は埃及棉と云ふ風に使用して居る。埃及物にはアツパー物と、ローアー物とがある。ローアーの方が更に細かい絲に適する。

市場の標準絲

さて綿絲市場に於ける淸算取引の標準絲は、東京は富士瓦斯紡績會社に於て製する赤富士印左二十番手と云ふ事になつて居り、大阪三品は東洋紡績會社の金魚印左二十番手となつて居つて、其他の綿絲は、期米と同樣に格附によつて受渡しの出來る樣になつて居る。

綿絲の格附

綿絲の格附は、つまり、受渡をやる爲めに定められる。大抵前年中、取引所に於て決定されるのであるが、時によれば、中途に於てなされる事があ

る。其一例として大正十三年七月五日大阪三品取引所に於ける格附改正を大阪朝日新聞から摘錄する。

綿絲格附改正

三品取引所に於ては五日格附委員會を開き定期二月限乃至四月限の格附を審査した。其の結果現在の雜牌高、上銀安に準じ大改正を行ふ事とし左表の如く決定し、他は全部現行格附を襲用する事とした。

會社名	銘柄	現格附	新格附	會社名	銘柄	現格附	新格附
鐘紡	釣鐘標	一〇、〇〇上	八、〇〇上	同	藍魚標	一〇、〇〇上	八、〇〇上
合同	雙鹿標	八、〇〇上	七、〇〇上	日紡	角七標	八、〇〇上	七、〇〇上
同	孔雀標	六、〇〇上	五、〇〇上	明治	日月標	二、〇〇上	一、〇〇上
日紡	郡山標	二、〇〇上	一、〇〇上	和歌山	日鳥標	七、〇〇下	六、〇〇下
富士	大黑標	七、〇〇下	六、〇〇下	寺田	二羽鶴標	八、〇〇下	七、〇〇下

大紡	社標	八、〇〇下	七、〇〇下	金澤	金寶標	八、〇〇下	七、〇〇下
岸紡	丸キ標	八、〇〇下	七、〇〇下	半田	張仙標	九、〇〇下	八、〇〇下
小津	菊標	九、〇〇下	八、〇〇下	辻紡	赤月星標	九、〇〇下	八、〇〇下
鹿兒島	丸十標	九、〇〇下	八、〇〇下	佐野	丸元標	一〇、〇〇下	八、〇〇下
岸紡	赤戎標	一三、〇〇下	一〇、〇〇下	同	黃戎標	一三、〇〇下	一〇、〇〇下
天滿織物	星標	新加入	六、〇〇下				

説明――右は大阪三品の標準絲たる東洋紡績の金魚印左撚二十番手を基にして、上ものは上へ、下物は下へ換算率を定めたものである。

綿絲の賣買單位

綿絲清算市場に於ける賣買の單位は、東京は十梱と云ふ事となつて居るが、大阪三品市場では、五梱となつて居る。

綿絲清算取引

綿絲の清算取引は、普通七ケ月限となつて居る。卽ち今日を七月とすれば、七月を當限として、八月、九月、十月、十一月、十二月、一月の各限が建つ譯である。而して無論その受渡等は株や米と同樣である。蓋しかく限月を長期

にしたのは、輸入の關係を考へた結果である事云ふまでもない。

從つて新聞相場欄を見れば、先づ各限の前場後場の立會表が掲出されて居るがが綿絲に限つて前場後場共に、寄付・寄止・中寄、大引の四つの立會をやる事となつて居る。

寄止と中寄　寄止と中寄は、綿絲の清算取引にのみ行はれる立會のことで、普通ならば（株とか米）寄附と大引のみなる處に、綿絲では寄附の止と、更に中の寄附とを設けて、前後兩場とも日に八回の立會をやる事となつて居る。それを略して、寄止中寄と云ふのである。

海外棉花市場　海外に於ける棉花市場の狀況は、內地の綿絲市場に影響する處が多いので、常に新聞の綿絲欄には、その狀況が報告されて居る。その主な市場は左の通り。

紐育市場　米棉

孟買市場（サッタ市場と云ふ）　印棉

リバープル市場（李浦市場と書く）　米印棉

孟買棉花電報に、オムラ、ベンゴール、ブローチ、またはスチールなどとあるのは、何れも同取引所で取引される棉の名で、主としてその產地の名をとつたのである。例へば左の如くである。（大正十三年七月五日時事新報所載）

海外棉花相場（五日）

△紐育棉花相場（大引）

反動狙ひの買ひ物に昂つたが跡現物屋の賣外しと綿製品市況の不振に小弛んだ

七月限	二八仙五〇	三二安	十月限	二五仙八九	四高
十二月限	二五仙一五	五高	一月限	二四仙八八	三高
三月限	二五仙〇〇	一高	現物	二九仙五五	一、三〇安

△李浦棉花相場（大引）

七月限	一七片〇八	一六安	十月限	一五片二八	一三安

現　物　一七片九二　四五安

△孟買棉花相場(午後七時發)

ベンゴール　七月渡　五四一留比　二安　オムラ　七月渡　五七一留比　——

ブローチ　四五月渡(新棉)五二九留比　三安

印棉の建値　印棉はその種類數多あるが、大體に於て、オムラ、ブローチ、ベンゴールの三種に區別して代表せしめて居る。右三者は、何れも產地の名である。この三者は、更に、スーパファイン、ファイン、フリーグード、グードの、四等級に分け、一ガンディ(七百八十四封度のもの二俵——日本の約三百斤)を以て建値の單位とし、これを印度の通貨留比——ルービー(我約六十五錢一厘)で取引して居る。

米棉の建値　米棉の紐育市場に於ける建値は、一封度幾何と云ふのである。而してそれは米棉ミッドリング(米棉の名)を基としてその上下に四等級を設け、合計九等級とし、それぞれミッドリングを標準として値を定めて居るのである。紐育市場の

相場は、このミッドリングの建値である。

埃及棉　埃及棉は、細絲の原料として珍重される。我國に輸入される數量は少ないが、漸次多くならうとしてある。日本棉花會社ではカイロに出張員を置き、買付けをなさしめて居る。アッパー、ローアー等の種類がある。

中京綿絲　中京綿絲は、名古屋取引所に於ける綿絲市場の狀況で、各新聞とも、この欄を特設して居る。名古屋近來の發展すさまじく、株式にしても米穀にしても、その取引狀態は、東京大阪に次ぐの盛況にある。從つて、綿絲市場も決して見のがしてはならぬ。その清算取引は、無論、東京米穀商品、大阪三品の兩取引所と同樣であるが、立會を一節二節三節四節と云ひ、寄附・寄止・中寄・大引と云はぬのが特異である。

二　生絲

綿絲が、日本輸入貿易品の王様であると同様に、生絲は、日本輸出貿易品の王様である。近年に於ける生絲の輸出高を擧げれば、

大正八年	六二二、六一八千円	大正九年	三八二、七一六千円
大正十年	四一七、一二四	大正十一年	六七〇、〇四七

即ちその大凡が判る。

さてその生絲は、一體何處に集められ、更に何處から輸出されるかと云ふと、云ふまでもなく、我國唯一の生絲貿易港横濱である。横濱には、曩に述べたごとく、これも我國唯一の生糸取引所があり、清算取引の外に現物の賣買取引をもやつて居る。其處で先づ生絲が横濱へ出るまでの順序をお話ししよう。

松崎繭市場

伊豆の西海岸に松崎と云ふ町がある。この松崎に建つ處の春繭市場こそは、實に毎年我國に於て最初の繭市場で、この取引を皮切りとして各地に繭取引が開始されるのである。松崎の繭市場は、大抵五月の中旬である。

原料繭

原料繭の買入は、松崎の繭市場の開始を皮切りとして、全國の各製絲家によつて行はれる。而して今日では、各養蠶家から直接に買入れることが盛んとなり、以前の樣に種種繭仲買なるものがあつて、中間の手數をとる事は、頗る少なくなつた。

生絲一梱

製絲家は、各地の原料繭を買集めて、之を製絲する。從つて製絲業の最も忙がしい時は、普通六七八月頃である。かくてその製絲して生絲となつたものは、毎五百三四十匁宛集めて之を一括となし、之に各自製絲家の商標を附した上でそれを包紙で包む、その包んだのを十六集めて木の箱に入れる。それが即ち生絲の一梱である。即ち横濱に集る處の生絲ば、この一梱を單位として、幾百梱、幾千梱と云ふの

である。

生絲賣込問屋

横濱に送られる生絲は、先づ誰の手に渡るかと云ふと、生絲賣込問屋なるものがあつて、それが之を受けるのである。生絲賣込問屋は横濱に四十餘の有力なのがある。卽ち原合名會社や、神榮會社、澁澤商店等をその筆頭とする。この賣込問屋は、製絲家と、輸出商との間に介在し、生絲賣買の仲介をするばかりでなく、製絲家に製絲資金の前貸もするので、その勢力はなかなか大きい。つまり横濱生絲問屋の製絲家との關係は、かう云ふ密接な關係にあるために、地方製絲家は、時に不利益とは思ひながらも、問屋の手を通ずると云ふ事になるのである。

倉入目方

生絲に倉入目方と云ふものがある。それは横濱の生絲賣込問屋が、各製絲家から送つて來た生絲の梱を開き、それを一一秤量して目方を見ることで卽ち倉に入れる前に、荷主から送付して來た目方——卽ち品目と同樣であるかどうかと云ふ事を檢査する譯で、而してこの持主、いはゆる倉入案內書なるものを作成して、荷

主に送つてやるのである。

手合

手合せと云ふのは、生絲問屋と輸出商との間に商談が開始される事であるがそれには問屋は主として地方荷主の意嚮を重んじ、輸出商の方では海外相場の强弱、問屋の腰の强弱等を基にして手合をやるのである。かくてはじめて商談の成立したのを、手合の口開きと云ひ、これが出來ると他の商店も之にならつて取引の値をきめるのである。

引込み

賣込問屋と、輸出商との間に、手合が成立すれば、問屋は大抵二日以內に之を輸出商の倉に搬入する。之を俗に引込みと云ふ。

生絲檢査

輸出商が、引込みをすますと、その內から一定數量を引拔いて、私設檢査所をもつて居るものは、其處で、檢査所を持たぬものは農商務省の生絲檢査所に送り、夫夫檢査をする。それを生絲檢査と云ふ。檢査の要目は、品位檢査・原料檢査正量檢査・練減檢査の四で、品位檢査は・再繰纖度・類節・强力・伸度等を檢査するの